

fig. 351 II期遺構平面図

S X07 9・7・10区で検出した畦畔状遺構で幅30~70cm、高さ10cmを測る。S T02盛土壁推定ラインの西側から始まり、一旦北西へ延びた後、ほぼ直角に曲がり南東方向へ延びる。S T02と近接し、これを取り囲むように営まれていることから、S T02と何らかの関係を有するものと思われるが、現段階では明らかにしえていない。

遺物 当該期の遺物は少なく、S T03に伴うと考えられる須恵器坏身(fig. 354-3)と壺(fig. 354-4)のほか、乳褐色粗砂層より検出した須恵器壺(fig. 354-5)・土師器小型丸底壺がある程度である。

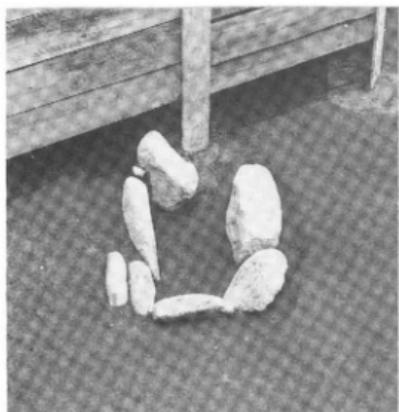


fig. 352 ST01

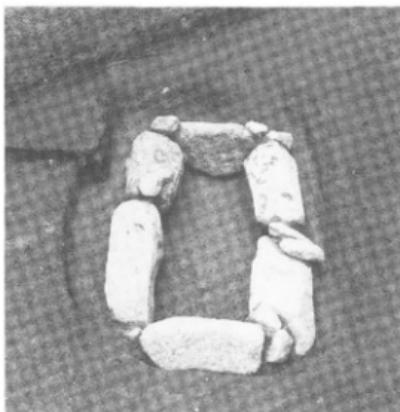


fig. 353 ST02

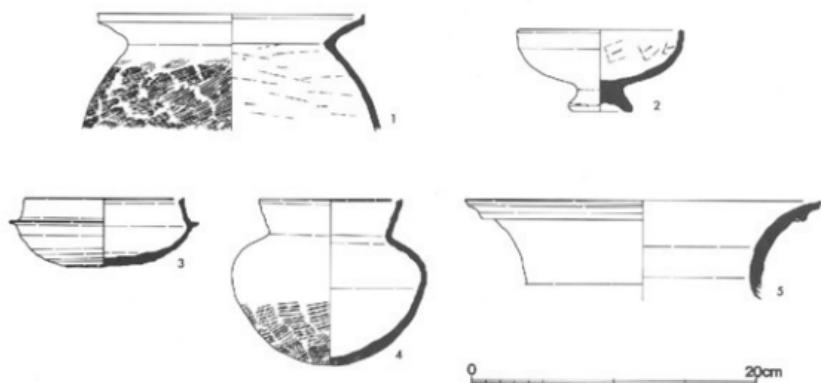


fig. 354 I期・II期 出土遺物実測図

(3) III 期

調査区中央部を北西から南東にかけて横切る S D 01（最大幅約 3 m、深さ約 25cm）の両側にピットなどの遺構が点在するものの、掘立柱建物等は確認できていない。特に、S D 01より西側の遺構面は不安定である。

出土遺物には、須恵器 (fig. 358)・土師器のほか、若干の円筒埴輪・漁網錐・婧壺などがある。



fig. 355
III期遺構面 (SD01)

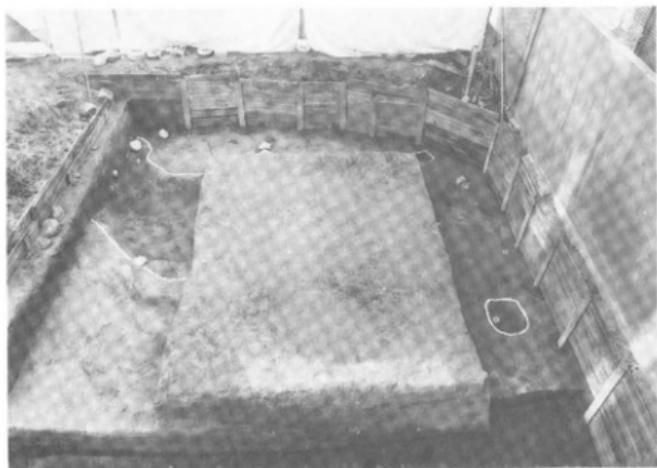


fig. 356
III期遺構面 (SX03)

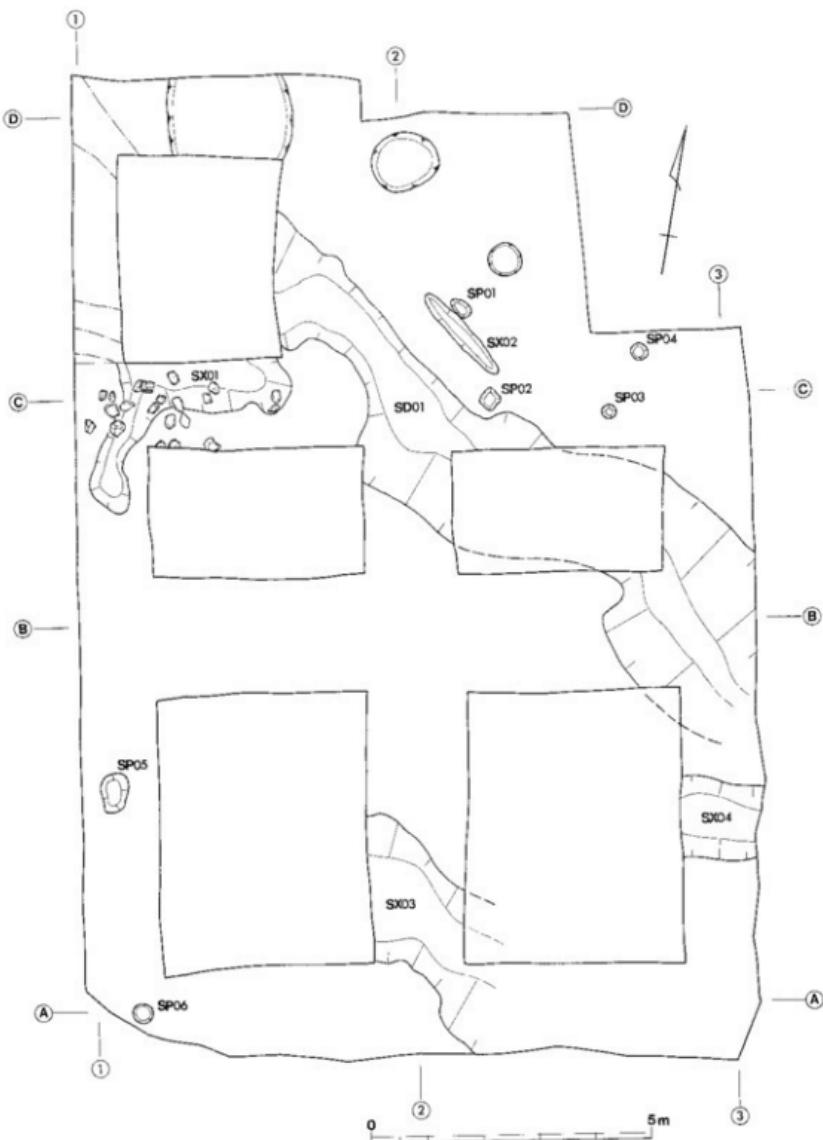


fig. 357 第4期 遺構平面図

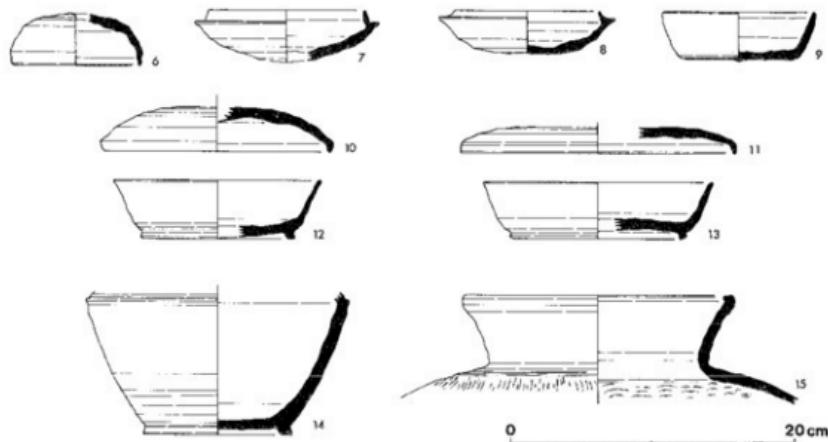


fig. 358 III期 出土遺物実測図

3.まとめ

以上、今回の発掘調査における成果を挙げたが、今後に残された課題の一部を示して、まとめにかえよう。

- (1) 今回生駒西麓産の庄内式期の甕が検出されたことによって、今まで時期比定が明確にできなかったⅠ期の上器群について、確實に庄内式期の所産と言及できるようになった。当地域では庄内式期だけではなく、前後の時期の類例も少なく、この成果は今後の上器編年作業に大きな役割を果たすことになる。
- (2) Ⅱ期では、これまでに確認された群集する小型方墳11基に加えて、今回S T01~03の箱式石棺を確認したことは特記できる。すなわち、墳墓形式が古墳を探る被葬者と箱式石棺を探る被葬者とは必ずしも階層差を具現したものとして把握できるであろう。また、古墳と同様に箱式石棺にも盛土が確認された点も興味深い。

被葬者の比定は今後とも困難ではあるが、住吉宮町を中心とする地点において墓域を形成していった古墳時代後期初頭の集団の在り方を示唆するものと言えよう。

今回の発掘調査によって、当地域の古墳時代を考えていく上で、住吉宮町遺跡の重要性はさらに追認されることとなった。今後も調査が進展していくものと思われるが、それらの資料の充実を待ってさらにさまざまな点から検討を加えていきたい。

22. 山田・中遺跡

1. はじめに 山田・中遺跡は昭和58・59年度の山田小学校々舎改築工事に伴う発掘調査で、新たに確認された遺跡で、その際飛鳥時代の竪穴住居他、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物や、土塙墓等が検出された。

そこへ、小学校の南側に県道三木・下谷上線改良工事の計画が興り昭和61年1月に試掘調査を行ったところ遺跡が確認された。そのため1月から3月まで、まず道路側溝部分の発掘調査を実施した。

今回は道路本体の部分、約2,700m²について調査を行った。

山田・中遺跡は六甲山地と帝釈山地に囲まれた山田川南岸の河岸段丘上に位置している。

この周辺で最古の遺跡は、下谷上の沢遺跡で、旧石器時代の有茎尖頭器が出土している。縄文時代のものでは小部ソバカ坂で遺物が見つかっている。次の弥生時代の遺跡は殆んど知られていなかったが、今回の調査で、弥生時代終末～古墳時代の住居址やサヌカイト製刃器・石鎌等が検出された。古墳時代になってしまって確認されている遺跡は限られており、上谷上の焼尾、原野の谷寺、下谷上の数ノ奥等の古墳群が知られていたにすぎなかつたが、これも今回6世紀初めの竪穴住居が発掘された。奈良・平安時代の遺跡も少ないが、次の鎌倉・室町時代になると遺跡は急増し、山田小学校内の調査ではかなりまとまった遺構も検出されている。また若王子神社本殿、八幡神社三重塔、箱木千年家等当時の建造物も残存している。



fig.359 調査地位図 1:2,500

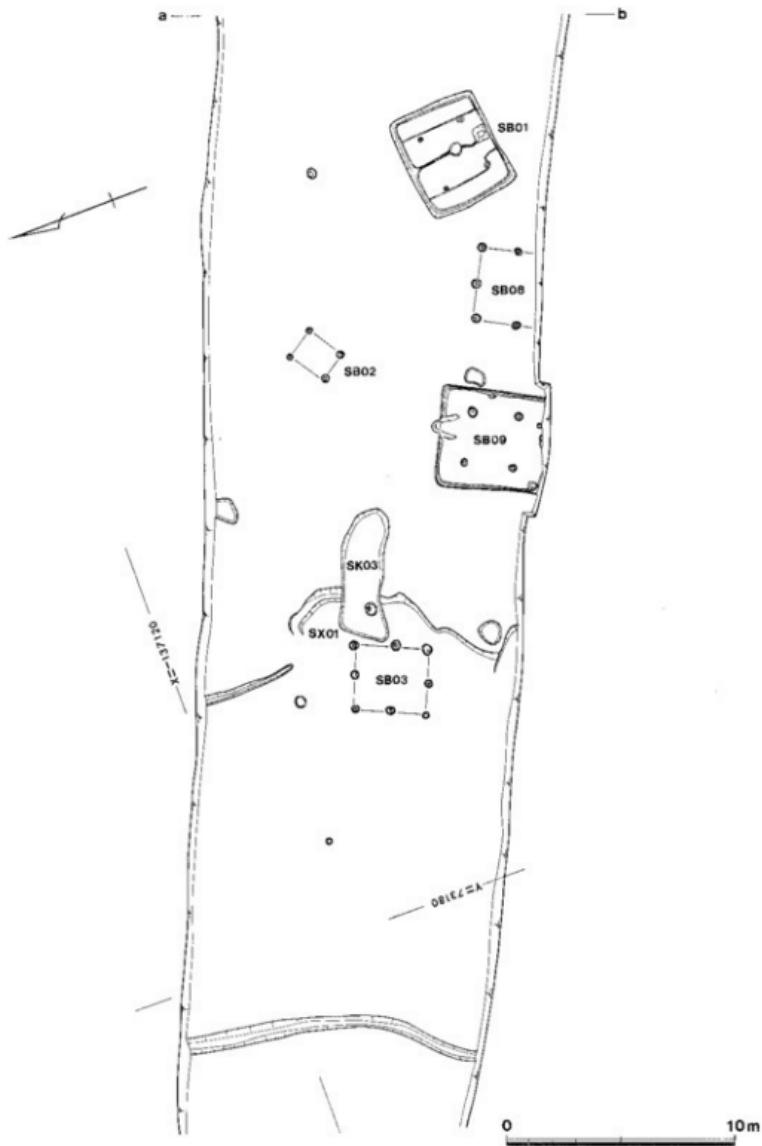


fig. 360 中央部遺構平面図

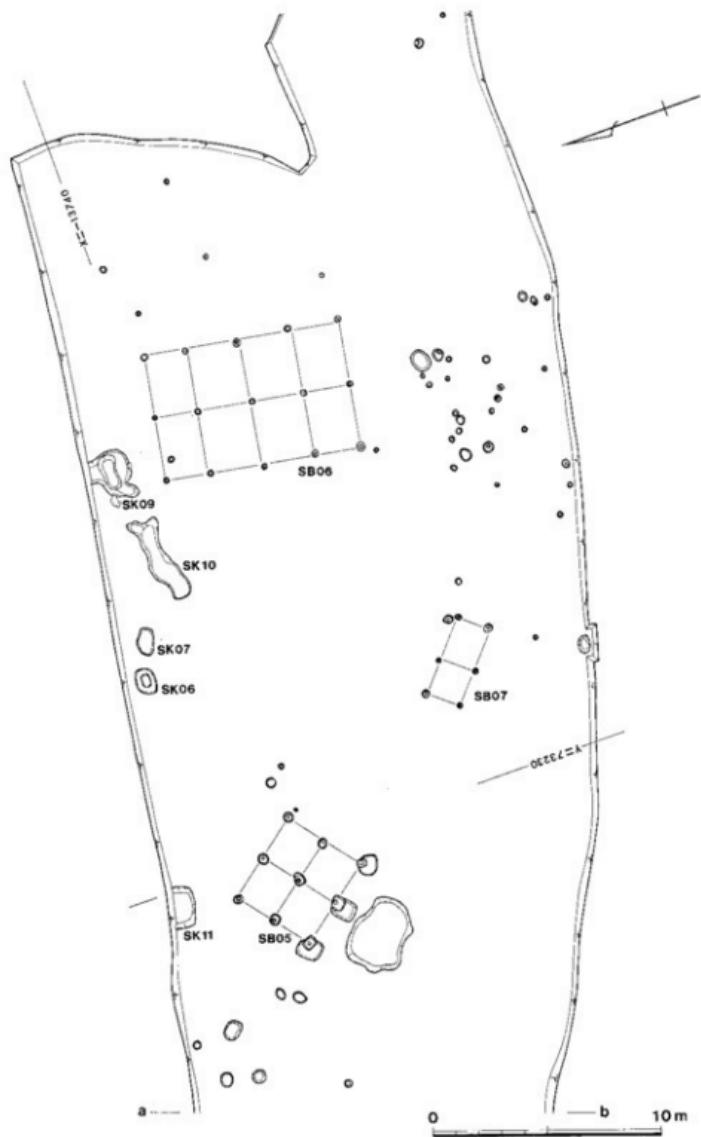


fig. 361 東半部遺構平面図

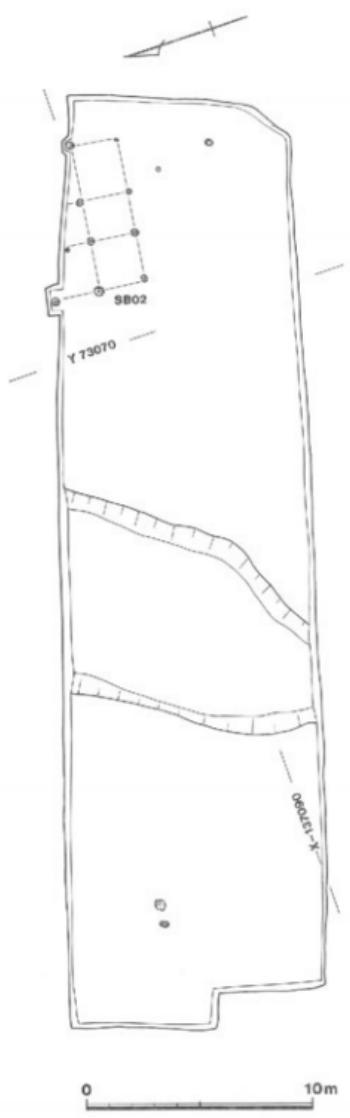


fig. 362 西半部遺構平面図



fig. 363 調査地全景(東から)



fig. 364 S B 01、08、09(西から)

2. 調査の概要 今回の調査では竪穴住居 2 棟、掘立柱建物 7 棟の他、溝、土坑、ピット等が検出された。

a. 弥生時代終末～古墳時代初頭

SB01 東西4.8m、南北4.2m、深さ0.6mを測る竪穴住居で、床面の東西内側に幅1m、高さ0.1mのベッド状遺構を作る。西側は南端から北へ0.8mの範囲が東へ約0.6m張り出している。ベッド状遺構は盛土で作られ、内側に面する段部には幅0.2mの板がたてられていたものと考えられる。西のそれの張り出し部についても東辺は明らかではないが、北辺は木材が残存していた。

床面中央やや南よりに径0.6m、深さ0.1mの炉があり、特に南半が焼けて赤変していた。炉の周囲には小穴が4つ、約0.6m間隔で穿たれていたが、用途は不明である。

南壁際に東西0.9m、南北0.6m、深さ0.35mを測る土坑があり、土坑底より若干浮いた状態で鉢3、落ち込んだ状態で鉢4、土坑東側より壺1、甕1、鉢1が出土した。

主柱の数は4本で2m間隔で立てられている。掘形の深さは0.5mを測り柱根が残存していた。



fig. 365 SB01 炭化材出土状況平面図

四周に深さ、幅とも約0.1mの周壁溝を巡らす。北側で中央から炉に向って小溝が穿たれている。

南西隅の柱穴のやや北東で粘土塊が上方より落下した状態で検出された。土器製作用のものとも考えられる。

この住居址は火災にあっており炭化材及び灰が床面から5~10cmの厚さで堆積していた。垂木材及び屋根材も残存していた。

この他遺物は、東側ベッド状遺構の北端近くより淡青色のガラス小玉が3個、原位置を保ったまま検出された。またこれのやや上方の埋土内より碧玉製管玉が1個出土した。

住居址の時期は庄内期と考えられる。



fig. 366 SB01 (東から)

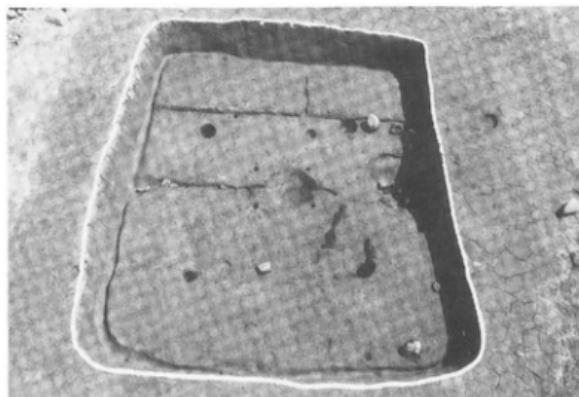


fig. 367 SB01 (西から)

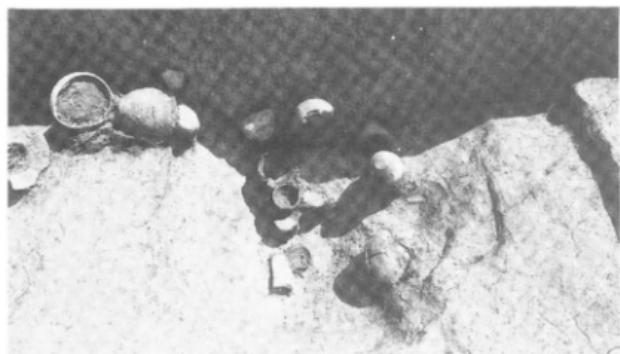


fig. 368

SB01 土器出土状況

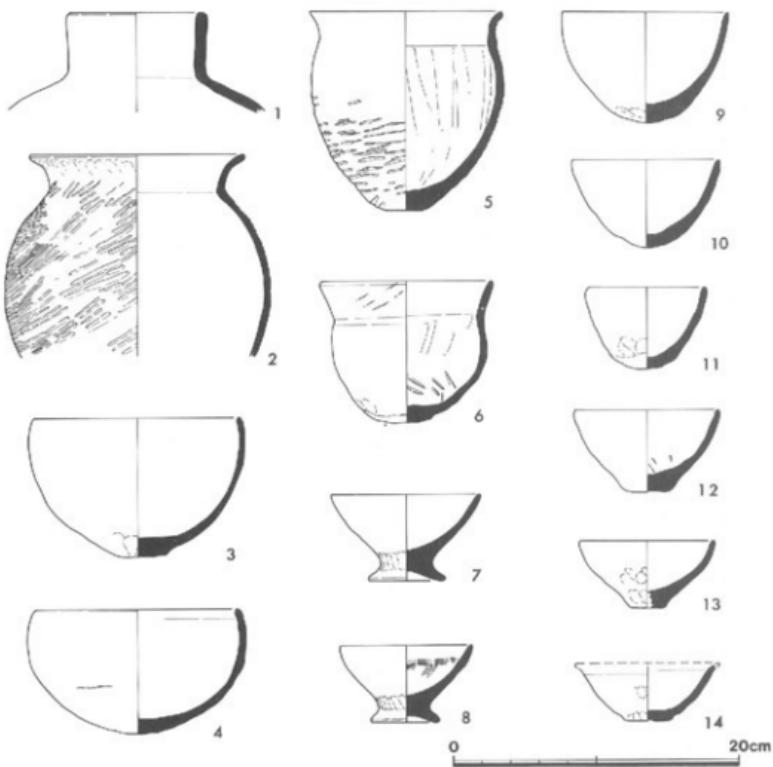


fig. 369 SB01 出土土器実測図

S B05

東西2間(3.7m)×南北2間(4.2m)の縦柱の掘立柱建物で、柱掘形内より弥生土器の小片が出土している。

土 坑

S K06・07・09・10は、長1m～4mの浅い土坑でこの時期の土器片が多数出土した。

S X01

長9.2m、幅2.8m、深さ0.2mを測る落ち込みで、西側は削平を受けている。性格は不明である。

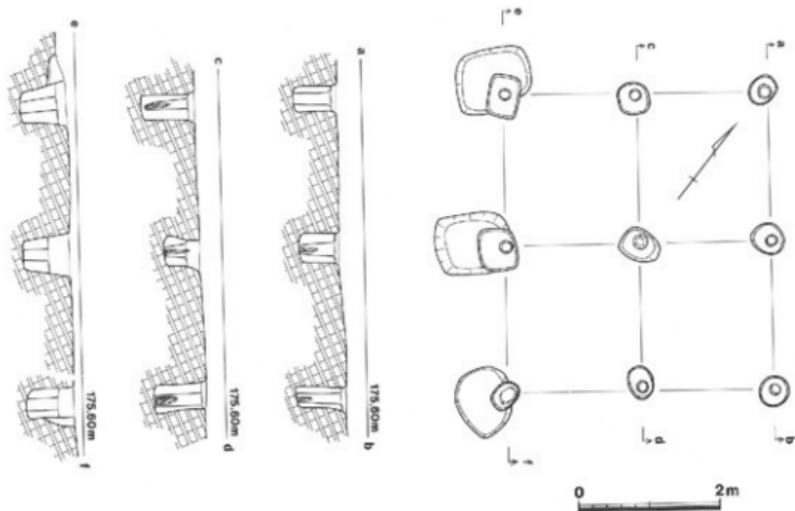


fig. 370 SB05 平面・断面図



fig. 371 調査地東半部 (SB05)

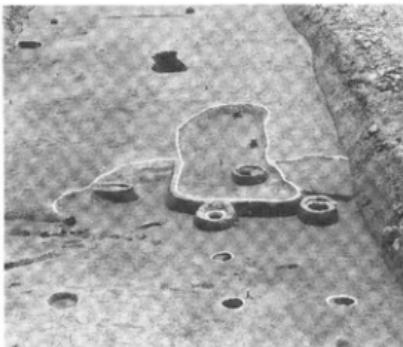


fig. 372 SX01

b. 古墳時代後期

SB09

東西4.5m、南北4.8m以上、深さ0.35mを測る竪穴住居で、周囲に幅0.2m、深さ0.1mの周壁溝を巡らす。

北壁中央やや東よりに幅1m、南北の現長1.2mの窓を作る。窓内には灰が数cmの厚さで堆積するが、窓本体は赤変していない。中央に支石が立ったままで、また内部及び周囲から土師器壺、須恵器蓋環が床面上より出土した。主柱数は4本で東西2.4m、南北2.2mの間隔を有する。所属時期は6世紀初頭と考えられる。

SK03

S X01を切る長5.6m、幅1.8m、深さ0.2mの不整長方形を呈す土坑で、中央南端ではほぼ完形に近い須恵器壺が出土した。

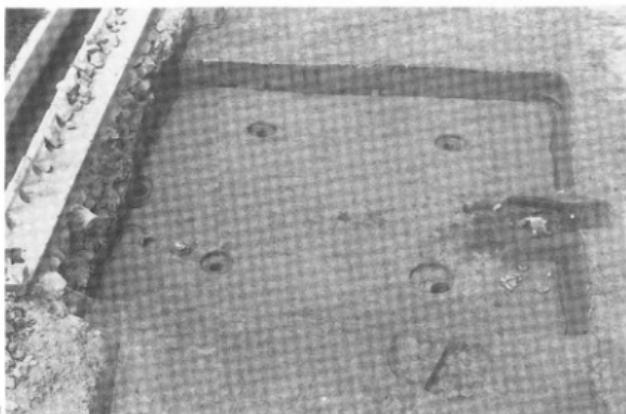


fig. 373 SB09 (東から)



fig. 374 SB09窓

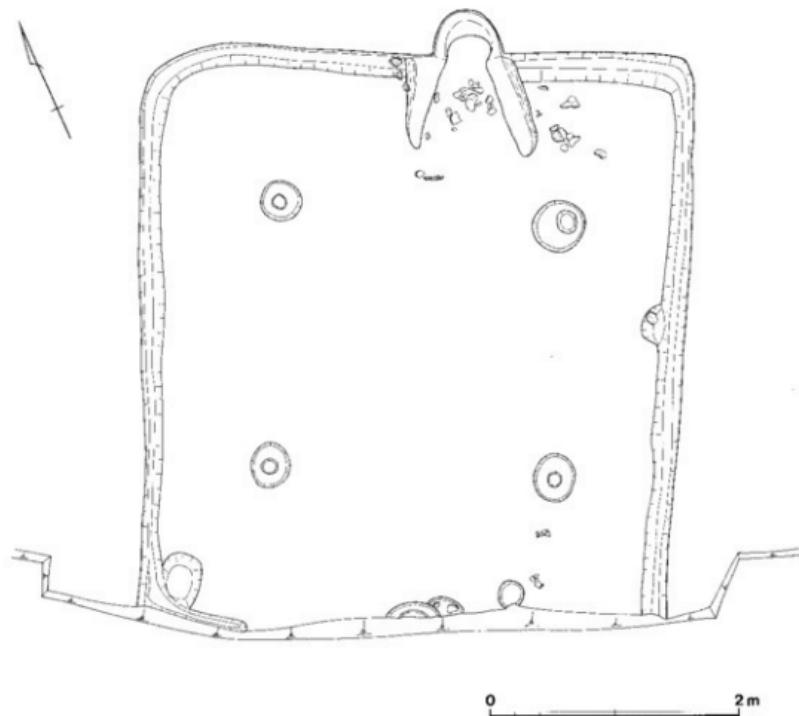


fig. 375 SH09 平面図

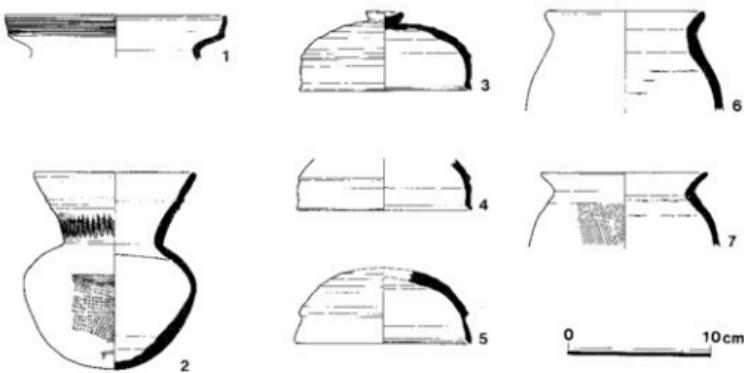


fig. 376 出土上器実測図 1:61年度出土 2:SK03 3~7:SB09

C. 平安時代～鎌倉時代

- SB03 東西1間（1.8m）×南北1間（1.5m）の掘立柱建物である。
- SB04 東西3間（乃至3間以上、6.6m）×南北2間（乃至2間以上、4.1m）の縦柱建物で、柱穴内より須恵器小皿が完形で出土している。
- SB06 今回の調査で最大の規模を有する縦柱の掘立柱建物で、東西2間（5.8m）×南北4間（8.6m）のものである。

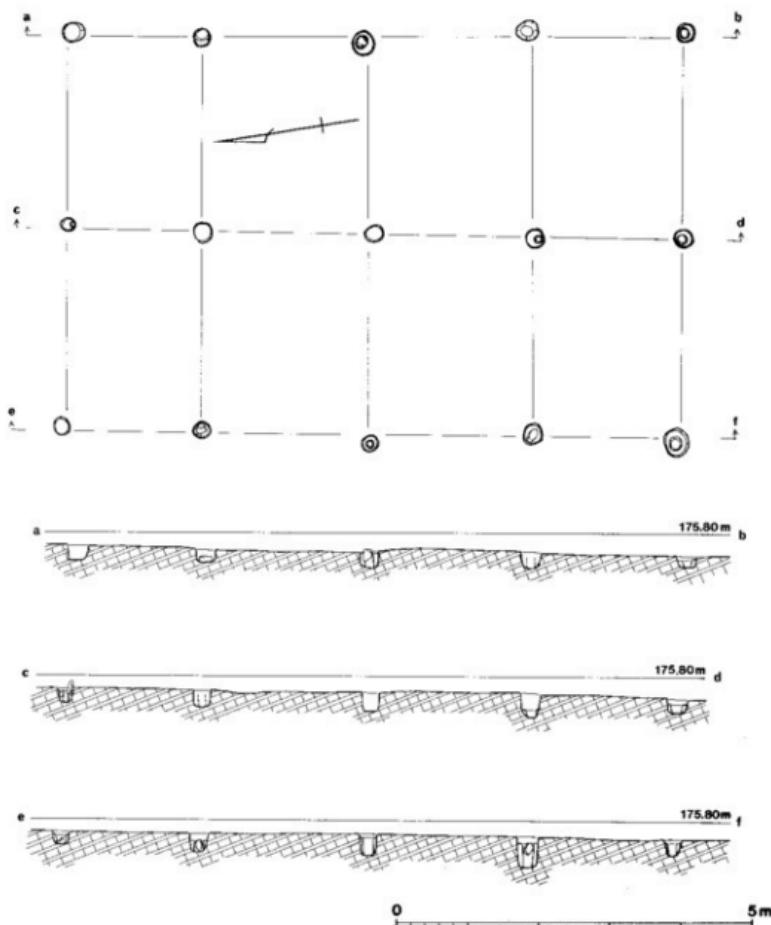


fig. 377 SB06 平面・断面図

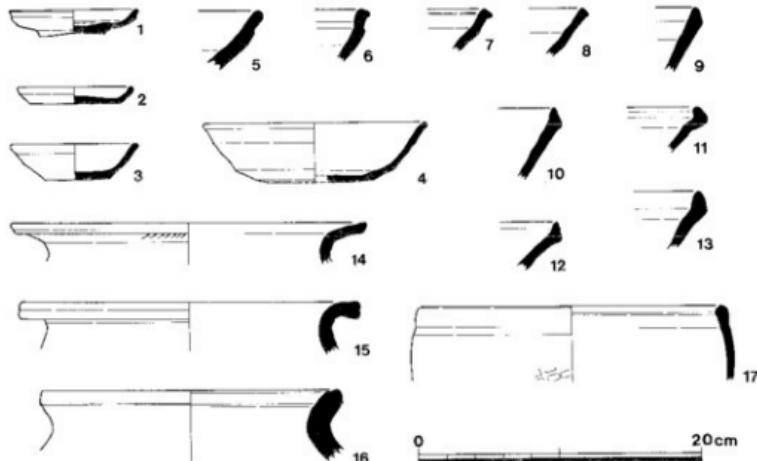
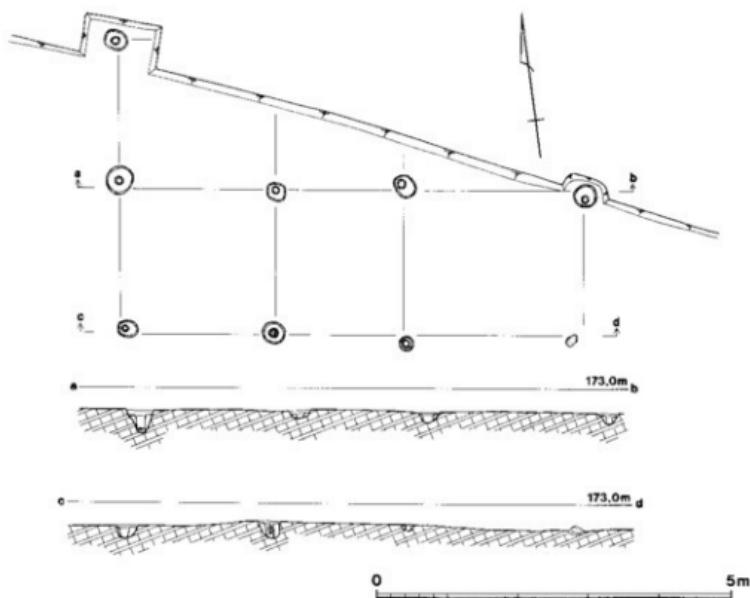


fig. 379 出土上器実測図 1:SB04 3:SB06 他は包含層

- S B07 東西1間（1.6m）×南北2間（3.4m）の掘立柱建物である。
- S B08 東西2間（3.2m）×南北1間以上（1.9m）の掘立柱建物で、主軸方向および形態的にS B03と似る。
- S D04 幅0.8m、深さ0.4mの断面逆台形を呈する溝で、長さは13m確認したが、南北にさらに延びるものと考えられる。



fig. 380 調査地東半部
(SB06)

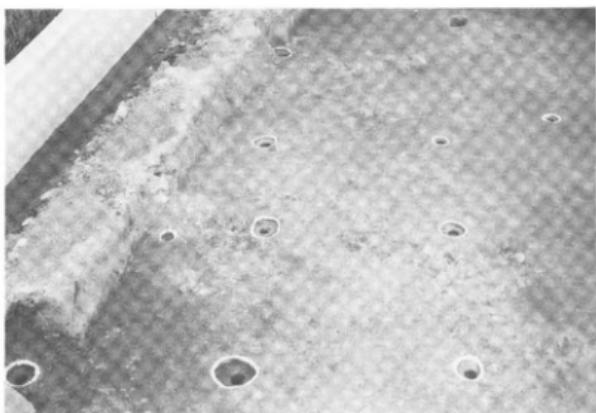


fig. 381 SB04

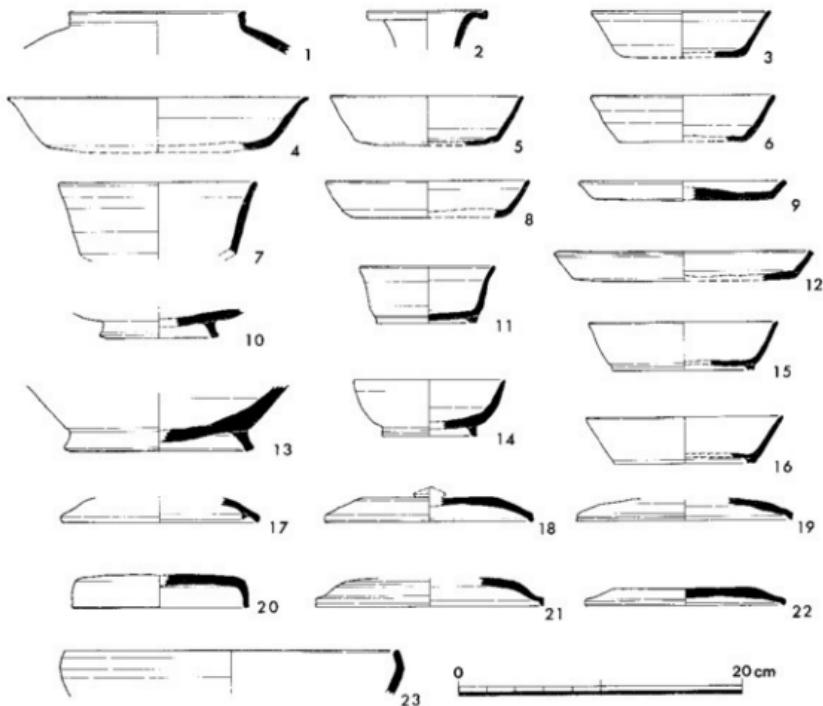


fig. 382 包含層出土土器実測図

3.まとめ

今回の調査では、今まで様相が明確でなかった当地域の弥生時代終末および古墳時代後期の集落が初めて検出された。

特に、前者の竪穴住居は火災にあって建築部材も炭化して残っていた。

なお、ベッド状造構を持つ住居址は、神戸市内では西区森友吉田南遺跡、同押部谷町養田遺跡、同伊川谷町池上北遺跡、同池上口ノ池遺跡、垂水区西舞子大歳山遺跡、同舞子陵東石ヶ谷遺跡に次いで7例目である。

古墳時代後期の竪穴住居も残存状態は良好で竈の附設も当地域としては早い方に属する。

平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物のなかで最大のS B06は、山田小学校内の調査で検出されたものとほぼ同方向の主軸を持ち、同時期の集落がさらに南にのびていたことを確認することができた。

はくじん
23. 北神第47地点遺跡

1. はじめに

昭和56年度に古墳参考地として試掘調査を実施した結果、古墳の存在は確認されなかったが、火葬墓を1基検出した。

昭和57年度にニュータウン第1地区造成工事に先立つ事前調査として、1,600m²について発掘調査を実施した。

その結果57基の火葬墓址を検出し、埋土内より人骨片、珠、土師器皿、鉄釘、古銭等が出土した。

昭和58年度には前年度の同一丘陵上で、西接する地域に工事用道路の敷設が計画されたため、影響を及ぼす範囲約870m²について発掘調査を実施した。19基の火葬墓を検出し、土師器、皿、古銭、鉄釘等が出土した。

今回の調査は昭和58年度調査区に西接する地域で、第1地区造成工事により影響を及ぼす範囲約2,000m²について発掘調査を実施した。



fig. 383
調査位置図 1:5,000



fig. 384
調査地全景（南から）

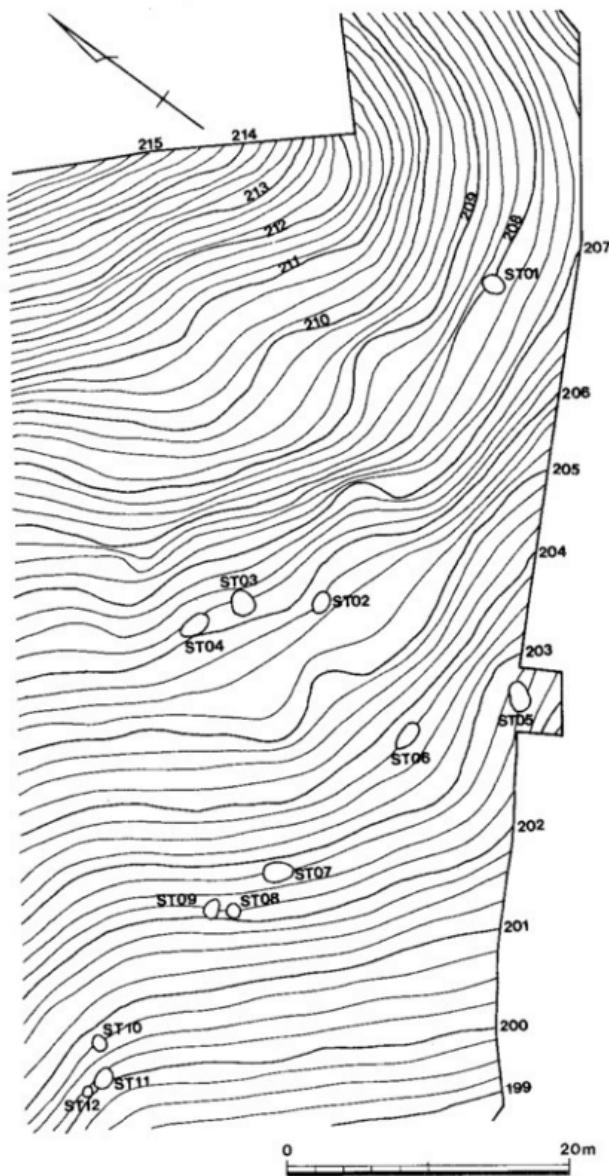


fig. 385
測査地平面図

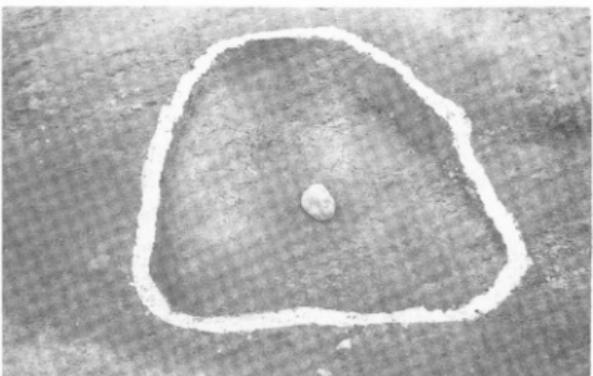


fig. 386 ST03

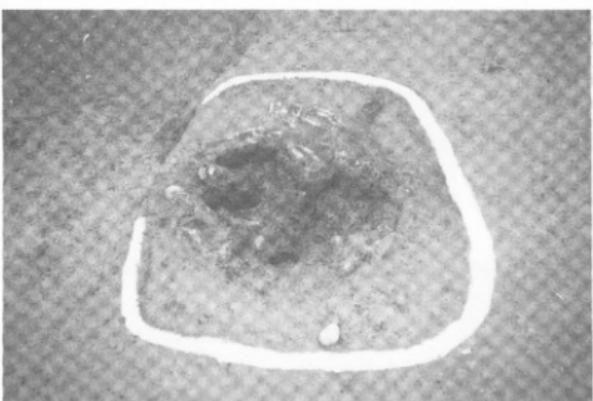


fig. 387 ST05

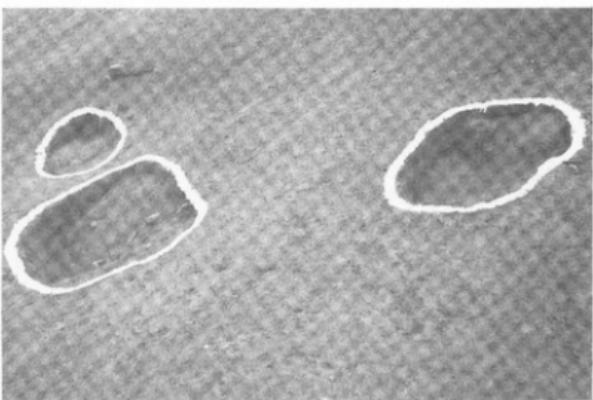


fig. 388 ST10~12

2. 調査の概要	調査区東側の南斜面で12基の火葬墓址を検出した。
S T 01	長径1m、短径75cm、深さ15cmを測る楕円形の遺構で、遺物は出土しなかった。
S T 02	長径95cm、短径60cm、深さ10cmを測る長方形の遺構で遺物は出土しなかったが、埋土内にこぶし大の小礫を含んでいる。
S T 03	長径1.2m、短径90cm、深さ10cmを測る楕円形の遺構で、底面中央にこぶし大の礫を置いている。遺物は出土しなかった。
S T 04	長径1.35m、短径75cm、深さ10cmを測る長方形の遺構で、遺物は出土しなかった。
S T 05	長径1.15m、短径95cm、深さ10cmを測る隅円長方形の遺構である。12基のうちで唯一、人骨片、炭化物、鉄釘等が出土した。
S T 06	長径1.35m、短径85cm、深さ20cmを測る楕円形の遺構で、遺物は出土しなかった。
S T 07	長径1.35m、短径85cm、深さ10cmを測る楕円形の遺構で、遺物は出土しなかった。
S T 08	長径70cm、短径50cm、深さ10cmを測る楕円形の遺構で、遺物は出土しなかった。
S T 09	長径1.1m、短径80cm、深さ10cmを測る楕円形の遺構で、遺物は出土しなかった。
S T 10	長径75cm、短径60cm、深さ10cmを測る楕円形の遺構で、遺物は出土しなかった。
S T 11	長径1.1m、短径75cm、深さ10cmを測る隅円長方形の遺構で、遺物は出土しなかった。
S T 12	長径60cm、短径50cm、深さ10cmを測る楕円形の遺構で、遺物は出土しなかった。

3. まとめ

今回の調査により昭和58年度調査区の西側に新たに12基の火葬墓址が確認されたが、これらの火葬墓址は同一丘陵上に立地しており、一連の墓域を構成していたと考えられる。

また、今回の調査区西側において火葬墓を全く検出しなかったことや、火葬墓の分布状況が西に行くにつれてしまいに稀薄になることから、今年度調査区付近が、これらの火葬墓群の西限と考えられる。

また、今回の調査では火葬墓の時期を明らかにできなかったが、これまでの調査例から見て15世紀を中心とする時代と考えられる。

えいばら ありい
24. 宅原遺跡（有井地区）

1. はじめに

長尾地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財試掘調査を昭和59年度以降実施している。その結果、今年度の工事対象区域にも古墳時代および鎌倉時代の遺物包含層および遺構が存在していることが判明した。

今回の発掘調査は、今年度工事対象区域内で工事によって遺物包含層もしくは遺構が影響を受ける範囲に限って実施した。

この遺跡は、地形的には東流する長尾川と三田盆地を画する丘陵との間の沖積段丘上に立地する。

長尾川流域では、宅原遺跡（内垣地区）で縄文時代後期の土器が出土しており、同時代の集落の存在が予想できる。弥生時代中期には、丘陵上に集落が形成される（北神N.T.4地点）。古墳時代には、宅原遺跡（大前地区）で竪穴住居を検出している。西・北の丘陵上には、定塚2号墳などの前期の古墳や、北神N.T.13地点などの後期の古墳が点在している。宅原遺跡（岡下地区）では奈良時代の掘立柱建物を検出している。ここからは「評」と記す墨書き器が出土しており、注目される。鎌倉時代の遺構は、宅原遺跡（大前地区）などで検出している。



fig. 389 調査地遠景

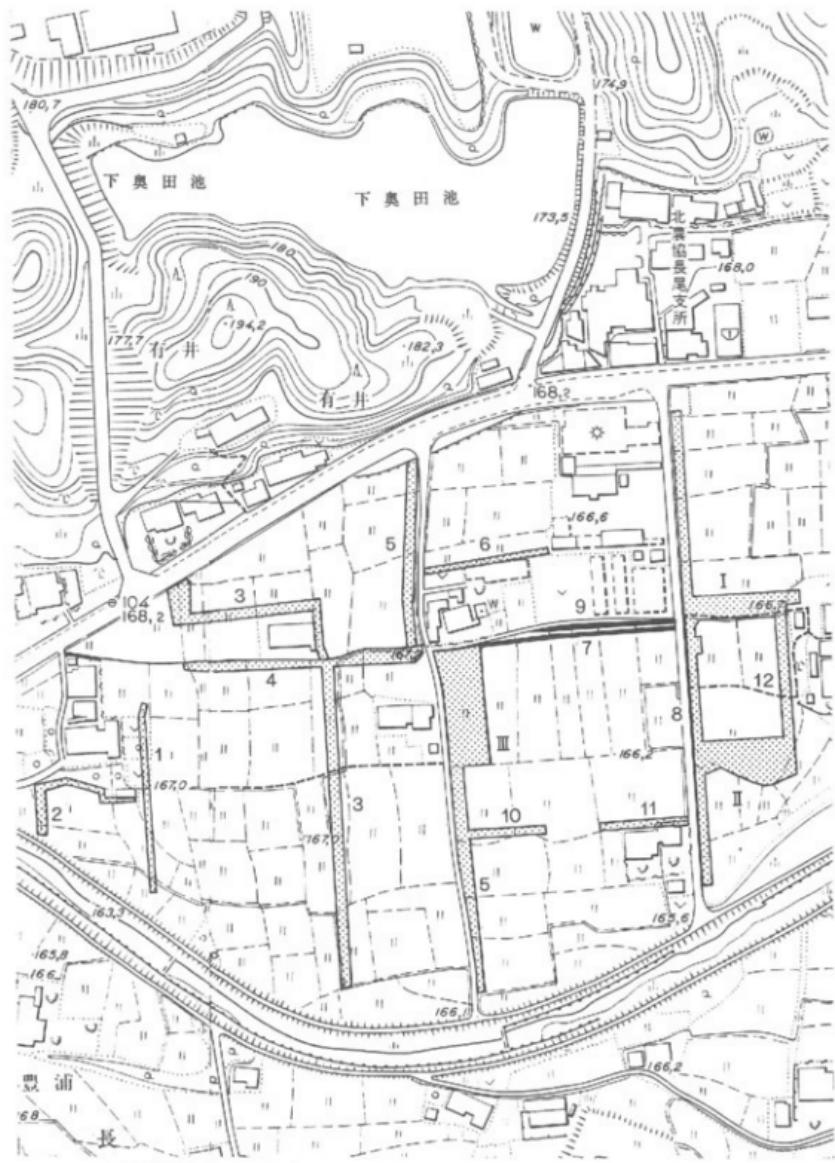


fig. 390 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

- 第1トレーナー 幅約1.5m、長さ約51mのトレーナーである。遺構は古墳時代前期の溝2条、竪穴住居2棟、不整形土坑、ピットなどを検出した。
- SB01 S B01は周壁溝をめぐらせる方形の竪穴住居で、東壁近くには覆土中に炭と灰を多く含む深さ20cm、径40cmほどの円形の土坑がある。東壁近くの床面で小型丸底壺が出土している。
- SB02 S B02も方形竪穴住居であるが、周壁溝は確認されなかった。床面上から小型丸底壺、甕などが出土している。
- 第2トレーナー 幅約2.5m、総延長約70mのトレーナーである。古墳時代前期の遺構面で溝3条、ピット群等を検出している。土師器の壺が出土したSD02は北東から東西にのびる幅約2.5m、深さ約0.3mの溝である。この西は幅約6.0m、深さ約0.9mの蛇行するSD01がある。

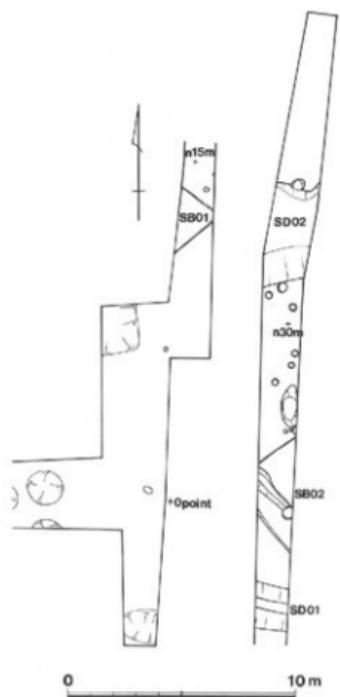


fig. 391 第1トレーナー平面図



fig. 392 第1トレーナー全景

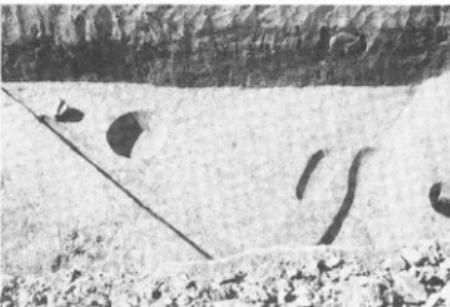


fig. 393 SB01



fig. 394 第2トレンチ東西

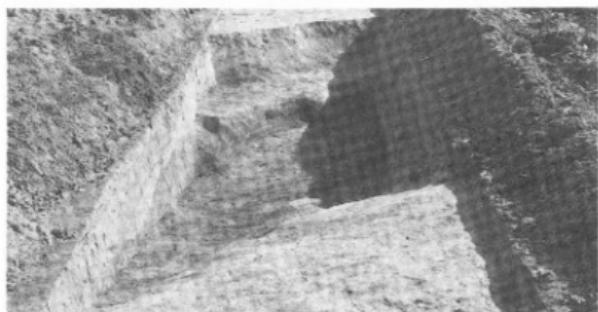


fig. 395 SD01

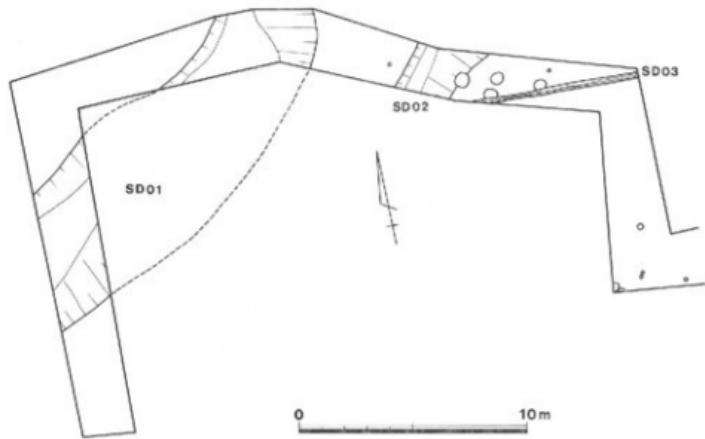


fig. 396 第2トレンチ平面図

第3トレンチ
(東西区)

幅約4m、長さ約66mのトレンチである。遺構面は2面を確認した。上層の第1遺構面では古墳時代後期の、第2遺構面では古墳時代前期の遺構を検出した。第1遺構面では、竪穴住居3棟、掘立柱建物1棟、溝7条の他、土坑、ピットなどの遺構を検出した。

SB01

SB01は方形の竪穴住居で、南辺は4.4m以上を測る。周壁溝がめぐり、柱穴は深さ65cmを測る。床面上を炭化した板材、丸木、茅などが覆っている。覆土中から須恵器と土師器の小片が出土している。

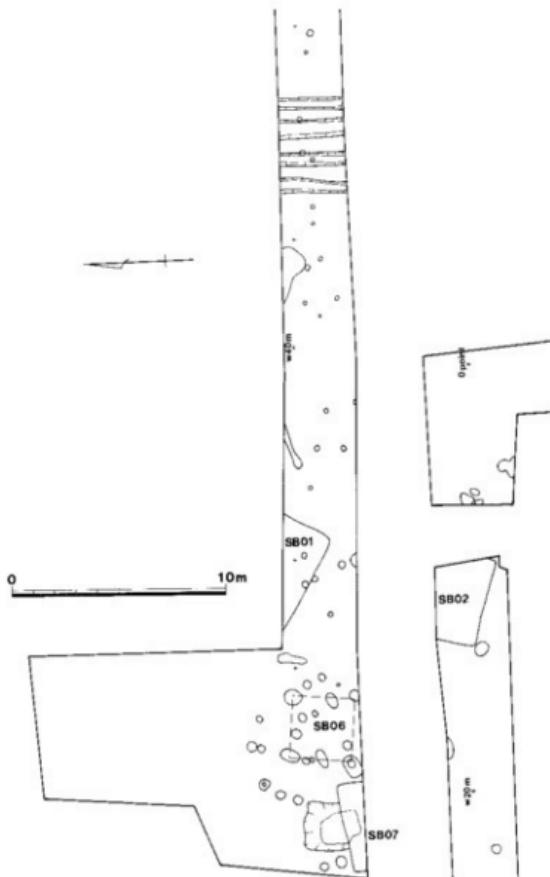


fig. 397
第3トレンチ
東西区平面図

SB02

SB02も焼失家屋である。方形の竪穴住居で、その南辺は4.4m以上を測る。深さ約40cmの柱穴を1か所確認している。住居址の東より炭化材が多く認められ、西よりはほとんどない。土師器の變形土器が住居址の西壁近くで出土している。

SB06

SB06は方形の竪穴住居で北辺は4.2mを測る。床面は貼り床によって構築されている。検出された主柱穴は1か所で、その深さは65cmである。住居址の北西隅に方形の土坑が存在する。

SB07

SB07は1間×1間の掘立柱建物である。柱穴の間隔は東西で2.4m、南北で2.3mを測る。

第2造構面では、ピット多數を検出している。

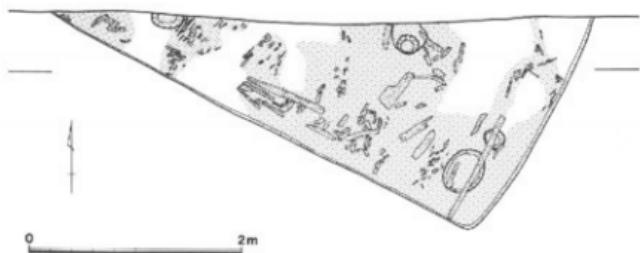


fig. 398 SB01 平面図

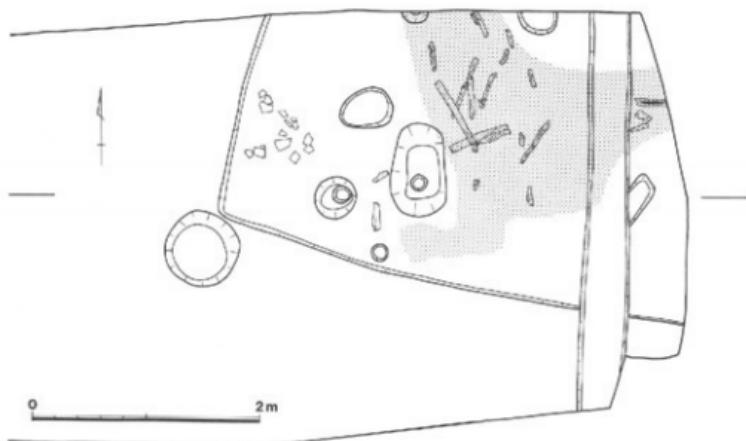


fig. 399 SB02 平面図



fig. 400 第3トレンチ
東半部（西から）

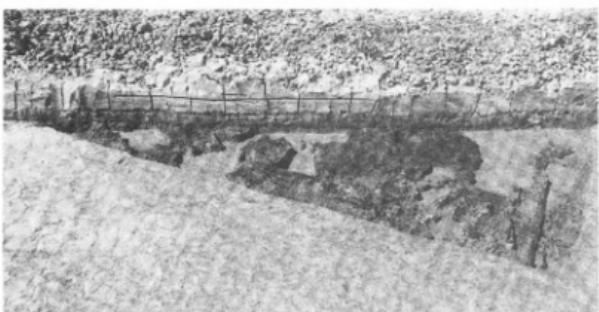


fig. 401 SB01

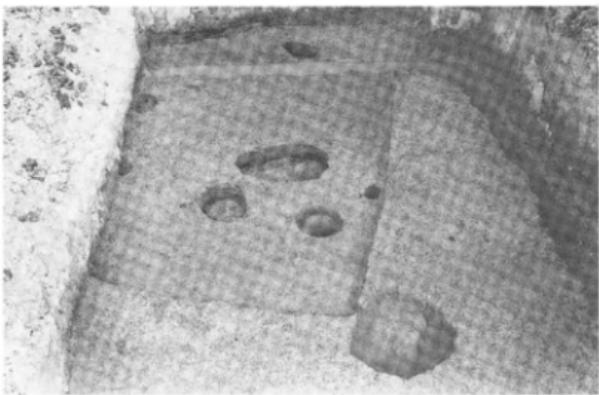


fig. 402 SB02

- 第3トレンチ
(南北区) 輪約4.5m、総延長約150mに及ぶトレンチである。旧耕土直下に鎌倉時代の遺構面が存在し、約15cmの間層をはさんだ下層に古墳時代前半期の遺構面が存在する。
- S B03 主な遺構には、竪穴住居3棟(S B03~05)、溝状遺構3条(S D05・06・09)があり、その他にピットや不整形の落ち込みを若干検出している。
- S B04 最も北に位置するS B03は、周壁を明確にできなかった竪穴住居で、遺物の出土状況などから南北長約5.5mと推定される。床面は淡青灰色細砂層より成るため不安定で、柱穴と考えられるピットと土坑を1個ずつ検出している。また、北壁沿いで焼土と土師器(壺)、南壁沿いで土師器(壺・高坏・鉢)を検出している。
- S B04 S B03のすぐ南側に位置する方形竪穴住居で、東半部が調査区外へ延びるもの、南北長5.7m、東西長2.3m以上、壁高約10cmを測るものである。柱穴と考えられるピットを2個検出している。両者とも直径約15cmの柱痕が遺存しており、柱穴の深さは70~90cm、柱間は心々距離で2.4mを測る。北壁のほぼ中央部と考えられる部分に竈状の遺構が認められ、高坏の环部を伏せられた状態で検出している。また、床面には多数の土師器が遺存し、器種には小型丸底壺、高坏、鉢等がある。

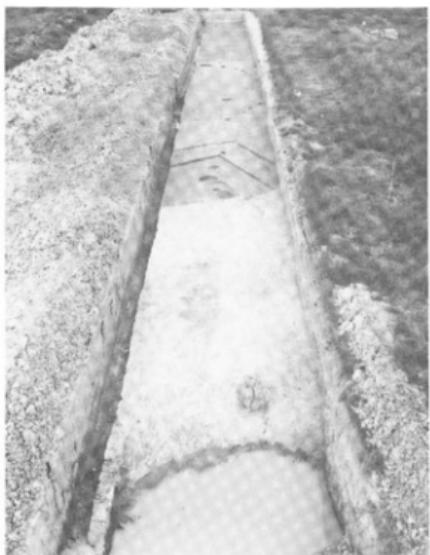


fig. 403 第3トレンチ(南北区)

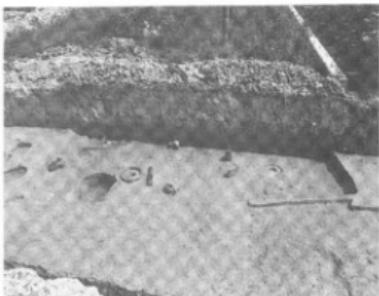


fig. 404 SB04

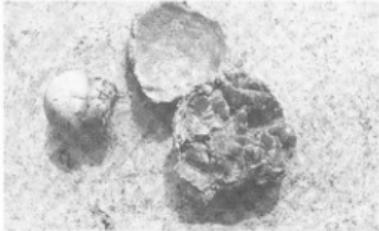


fig. 405 SB04 遺物出土状況

SB05

SB05は南端の微高地に立地する竪穴住居で、東南隅と西端が調査区外に延びるもの、ほぼ全容の窺えるものである。南北長5.1m、東西長5.2m、壁高20cmを測る。北壁と東壁に沿って逆「L」字形に幅1.2m、高さ10cmの淡黄灰色砂質土から成るベッド状遺構が造り付けられた特徴的なものである。床面中央には2個の土坑が東北方向に並んで作られている。ピットは2個確認しているが、柱穴とは認定できなかった。遺物にはベッド状遺構床面に接して土師器（高环）を検出している他、床面上より壺・鉢等を多數検出している。

上記した3棟の竪穴住居は、いずれも古墳時代前半期のもので、床面上ないしはやや浮いた状態で炭化材を検出しておらず、焼失したものと思われる。

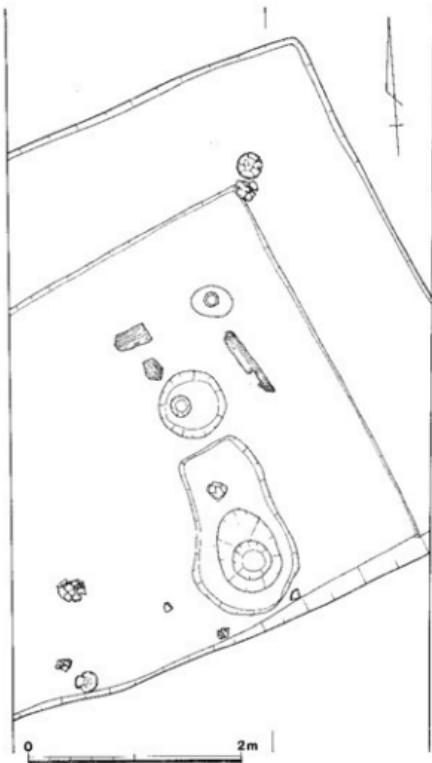


fig. 406 SB05 平面図

SD06

SD06はSB03・04の下層で検出した溝状造構で、西から東へトレーナーを横断するように走る。最大幅19m、深さ1~1.5mを測る。埋土は炭まじりの淡青灰色極細砂層が中心である。北側肩部で土師器（小型丸底壺・大型二重口縁壺・高环）をまとめて検出しているほか、埋土中より完形品に近い多量の土師器とガラス玉1点が出土している。

なお、SD06の南側からSB05の北側までは、乳白色粘土の堆積が認められる。この地区はほぼ平坦面で、顕著な造構はSD09だけであり、部分的に畦畔状の高まりが確認できるため、水田地区であったと考えている。

また、間層中より勾玉（材質は不明）1点が出土している。

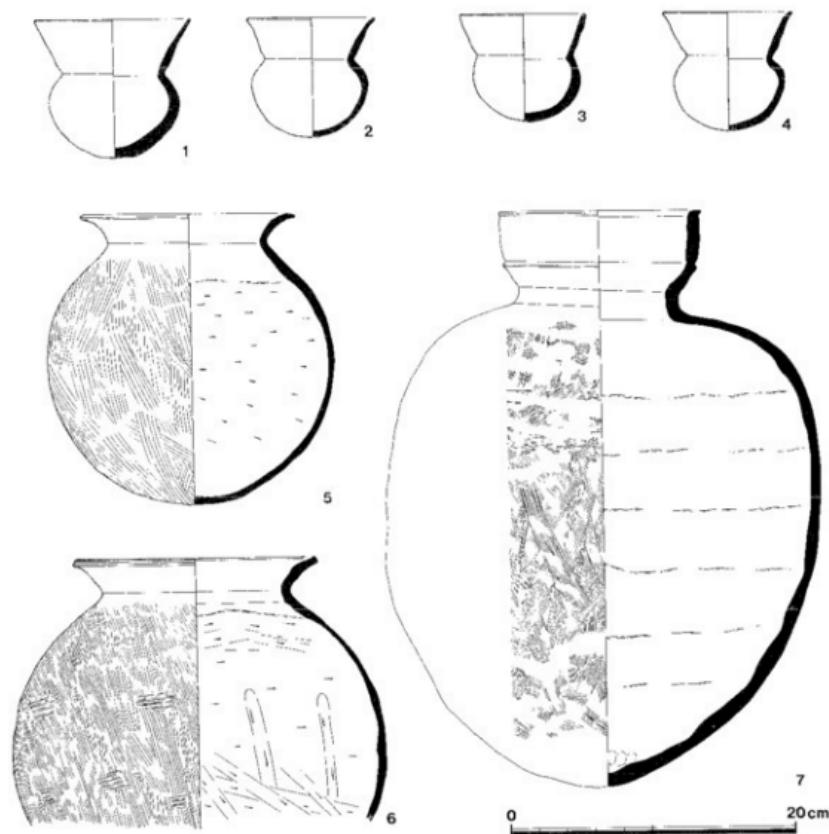


fig. 407 SD06 出上土器実測図 7 : S = 1/6

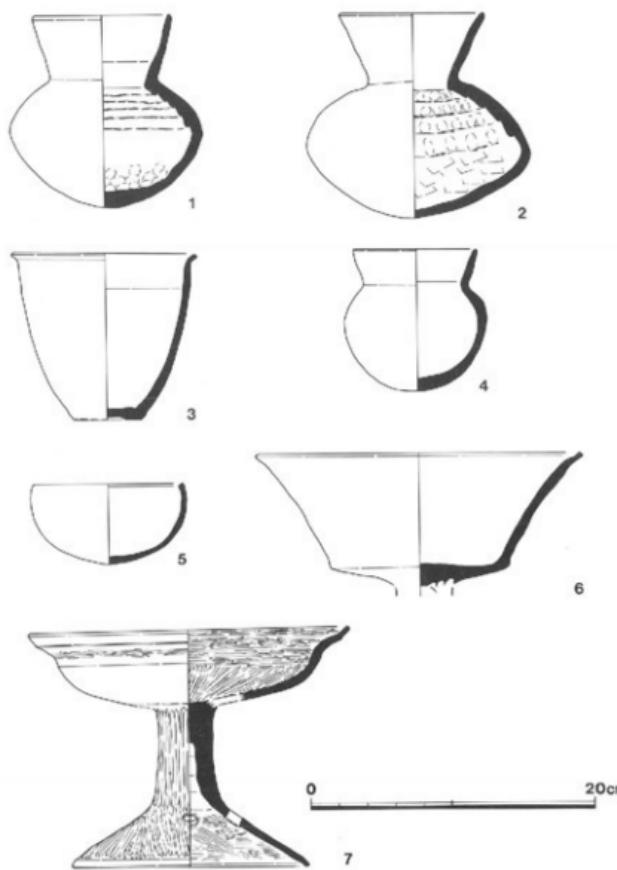


fig. 408 3トレンチ

住居址出土土器実測図

1~3 : SB03

4~6 : SB04

7 : SB05

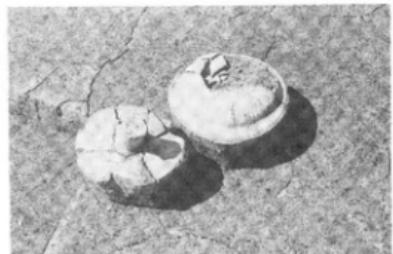


fig. 409 SB05 土器出土状況

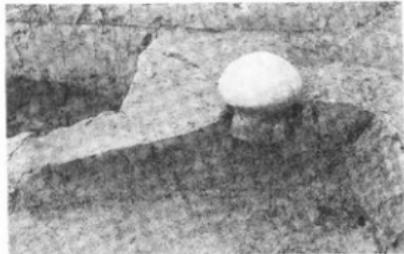


fig. 410 SB03 土器出土状況

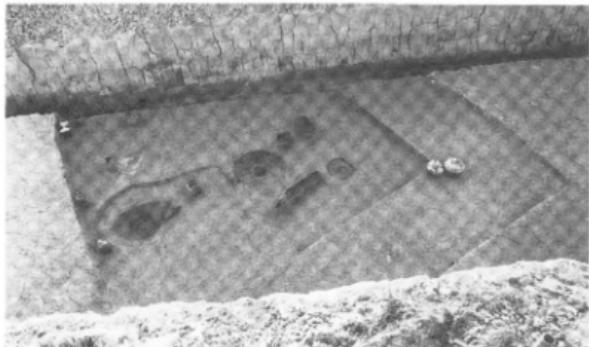


fig. 411
SB05 遗物出土状况

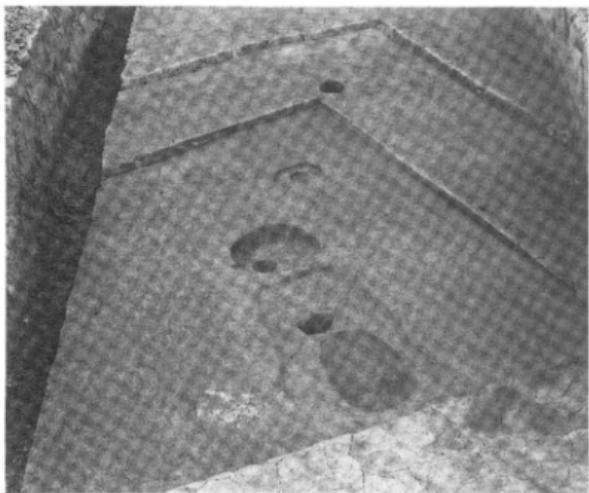


fig. 412 SB05

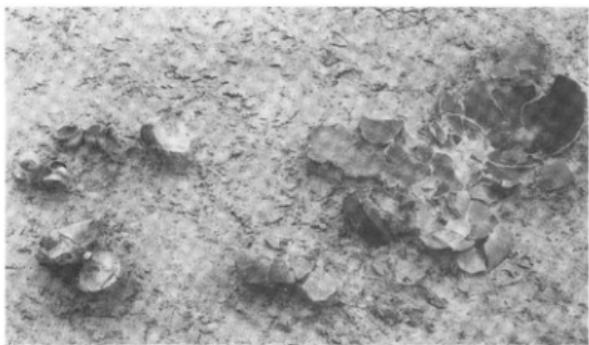


fig. 413
SD06 土器出土状况

- 第4トレンチ** 幅約1.2m、長さ約81.5mのトレンチである。遺構面は2面が検出された。第1遺構面では古墳時代後期の、第2遺構面では古墳時代前期の遺構を検出した。
- 第1遺構面で検出された遺構は、溝4条と土坑4基である。
- 第2遺構面では竪穴住居3棟、溝2条、土坑1基、ピットを検出した。
- S B11** S B11は東西5.3mを測る方形の竪穴住居である。主柱穴は2本分を検出した。その深さは住居址床面から約50cmで、柱の間隔は2.6mをはかる。東壁近くで土師器の夔形土器が出土している。
- S B12** S B12は東西3.9mを測る方形の竪穴住居である。柱穴は確認されなかつた。南壁近くの床面上から土師器夔形土器が出土している。
- S B13** S B13は東西5.5mを測る竪穴住居である。柱穴は確認されなかつた。床面上から数個の土師器夔形土器が出土している。
- 第5トレンチ** 幅約3.0m、長さ約220mのトレンチである。古墳時代の竪穴住居2棟、用途不明の方形落ち込み2基、ピットなどの遺構を検出した。

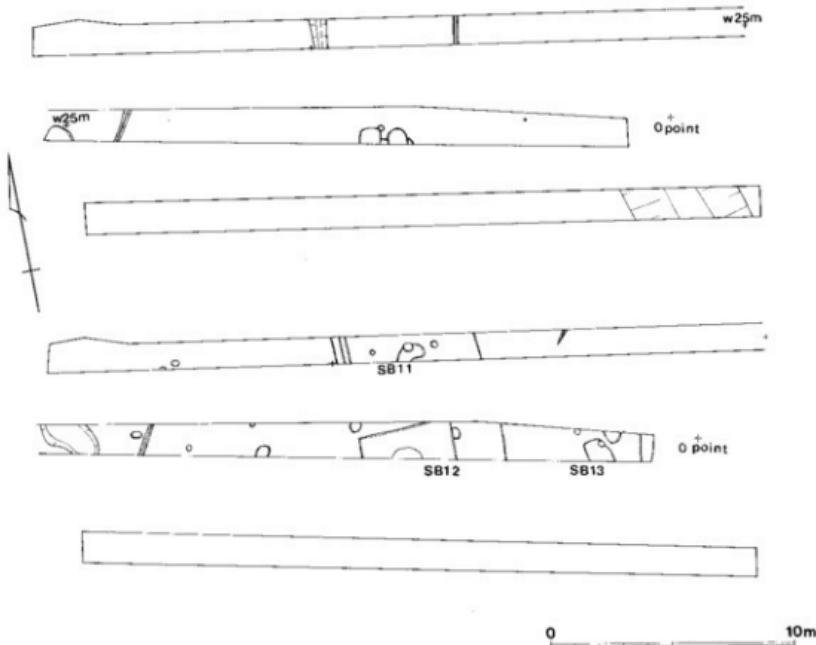


fig. 414 第4トレンチ平面図

S B01 S B01は、南北6.5m、東西3.0m以上を測る方形の堅穴住居と推定できる。床面より須恵器环身の完形品が1点出土している。6世紀中ごろに属する。

S B02 S B02は南東コーナー部分のみを検出しており、規模は不明である。コーナー部の外側に土師器の土器群を検出した。住居址埋土の遺物からS B01と同時期に属すると推定できる。

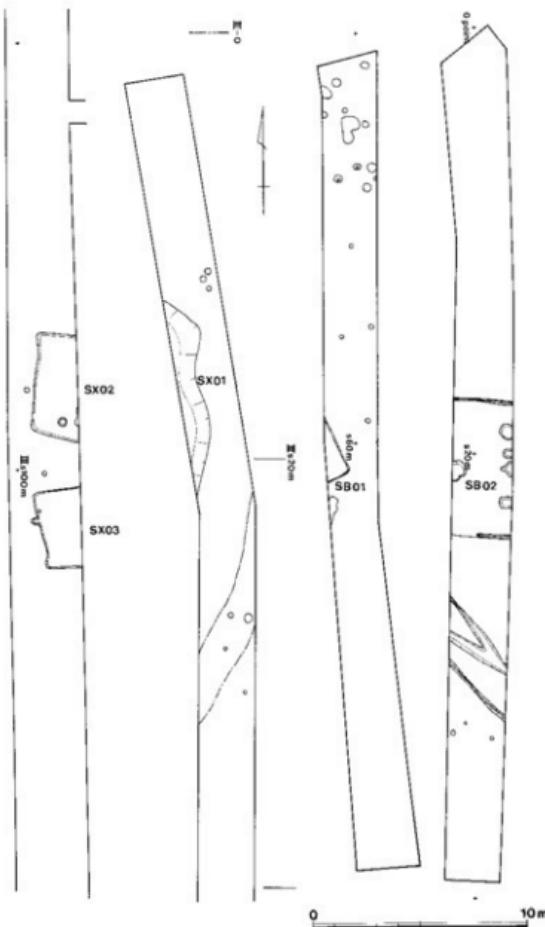


fig. 415
第5トレンチ平面図



fig. 416 第4トレンチ全景（東から）

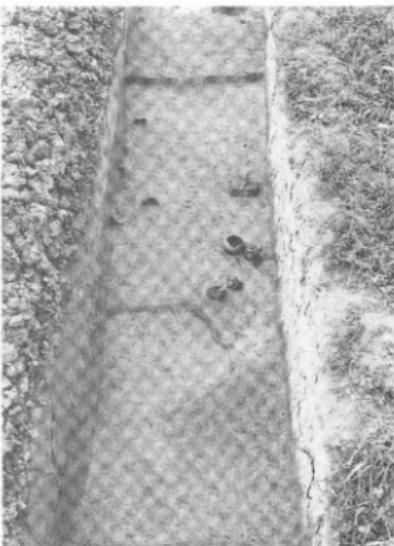


fig. 417 第4トレンチ SB13



fig. 418 第5トレンチ北半部（北から）



fig. 419 第5トレンチ中央部（北から）

第6 トレンチ

幅3m、長さ53mのトレンチである。古墳時代の竪穴住居2棟、鎌倉時代の土坑8基を検出した。

S B01

S B01は東西5.0m、南北4.5mを測る方形の竪穴住居である。残存状態が悪く、深さは3cm程度である。主柱の数も不明確である。埋土から出土する須恵器から6世紀中ごろに属すると推定できる。

S B02

S B02は南東コーナーのみの検出であるため、規模は不明である。S B01と同様に残存状態が悪い。

この2棟の竪穴住居は、西側の第5トレンチで検出した2棟の竪穴住居とはほぼ同時期であり、これらが住居址群として集落形態の一部を形成していたものと推定できる。

トレンチ東端で不整形の密接した土坑群を検出した。若干の鎌倉時代に属する須恵器小片が出土している。この土坑群の機能については今回の調査区域では断定できない。



fig. 420 第6 トレンチ土坑群

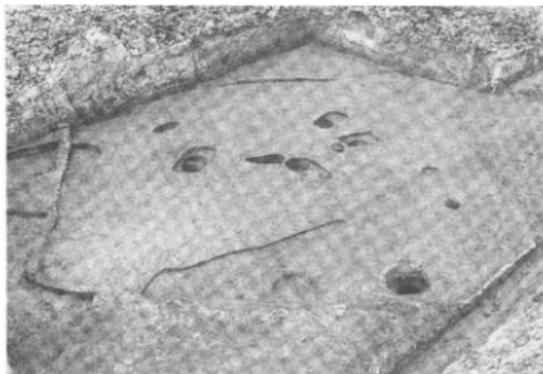


fig. 421 SB01

第7・9
トレンチ

第7トレンチは幅約1m、長さ約80mの、第9トレンチは最大幅1.8m、長さ約42mのトレンチであり、両者は近接し、ほぼ並行に設定している。

第7・9トレンチで検出した遺構は、溝状造構1条、ピット2か所の他、性格不明の落ち込みがある。これらの年代は遺物がほとんど出土していないため不明であるが、層位からすると古墳時代前期である可能性が高い。

第8トレンチ

幅約3m、全長約200mを測る。旧耕土直下に遺構面がひろがっている。古墳時代後期と鎌倉時代の両時期の遺構を同一面で検出した。

古墳時代後期の遺構としては、竪穴住居1棟（SB01）を検出した。すでに後世の削平を受けており、深さは3cm程度しか残っていないかった。床面には炭化層が部分的にひろがっている。埋土からは若干の須恵器が出土している。

鎌倉時代の遺構は、柱穴、溝、土坑などである。しかし、柱穴列を確認したものの、トレンチ幅が約3mであるために建物址の一部分であるのか否かなどの判断は下し難い。

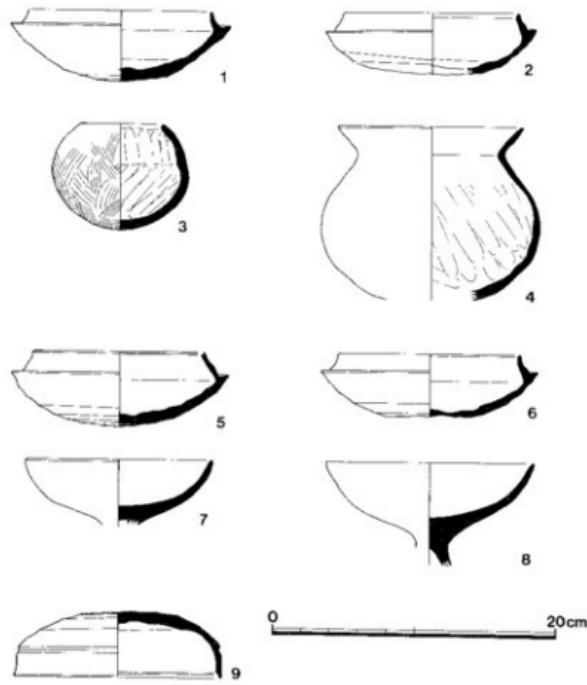


fig. 422 各トレンチ

出土土器実測図

1 : 3トレンチSK07

2 : 包含層

3 : 4トレンチSB13

4 : 4トレンチSB12

5・6・5トレンチSB02

7・8・5トレンチSB01

9 : 9トレンチSD01

第10トレンチ 幅約1m、長さ約70mのトレンチで、鎌倉時代の遺構面と古墳時代前半と考えられる遺構面がある。前者では、トレンチのほぼ中程でピットを4個検出しており、うち1個から土師器壙を検出している。後者では、幅約4m、深さ1.5mの溝状遺構を確認しているが、出土遺物が小片のため詳細な時期比定はできない。

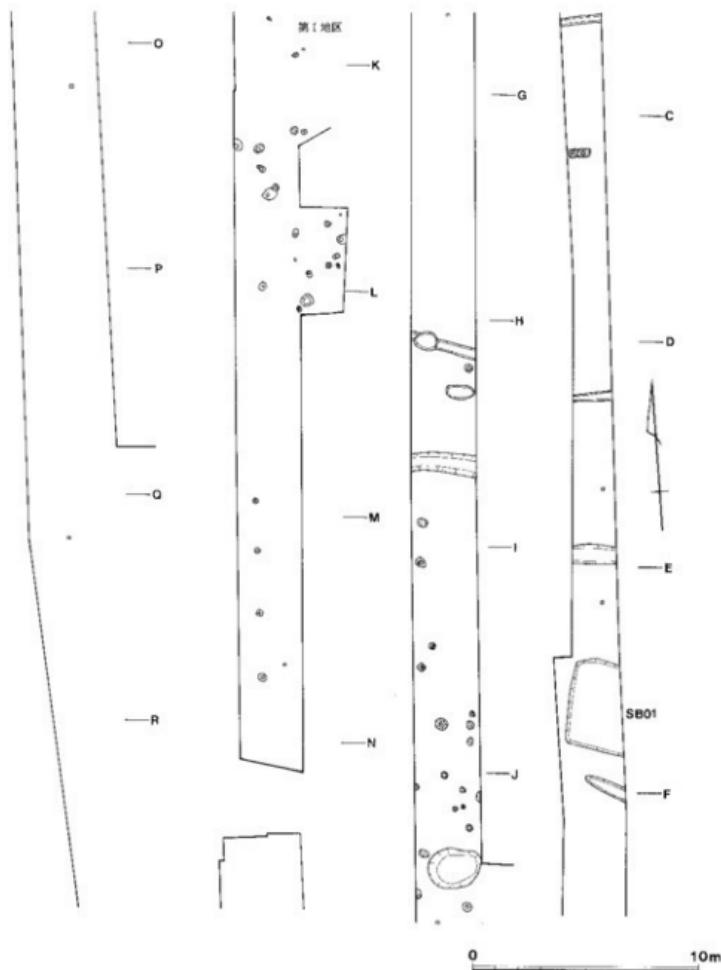


fig. 423 第8トレンチ 平面図

第11トレンチ

幅約3m、長さ約38mのトレンチである。古墳時代の竪穴住居1棟、不定形土坑1基を検出した。

SB01

SB01は東西約4.5mを測るが、大半が調査区の南側に伸びているため南北規模は不明である。床面には炭化材が一面に広がっており、焼失したことが窺える。炭化材は原形をとどめるものはほとんどなく細片化している。古墳時代前期から中期に属すると推定できるが、出土土器が細片化し少數であるため、厳密な限定が困難である。SK01からは古墳時代前期の土器が出土している。

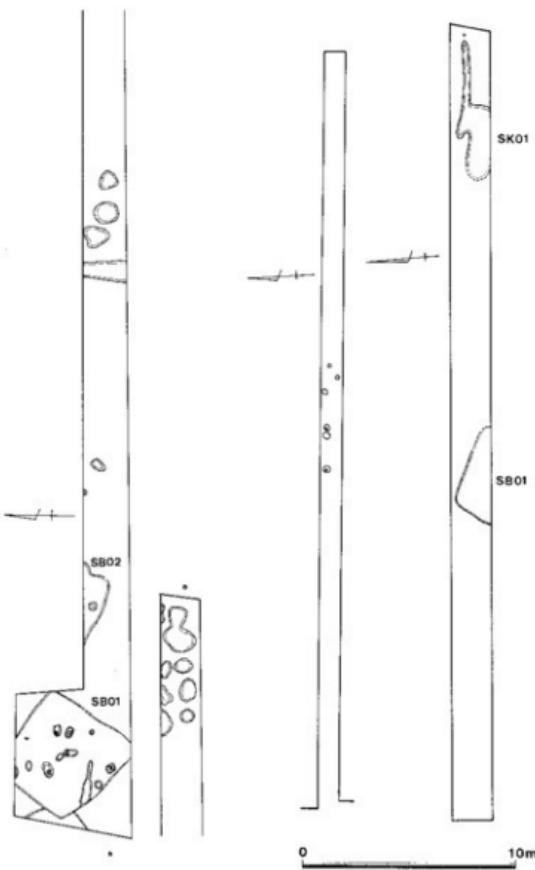


fig. 424
第6・10・11トレンチ
平面図

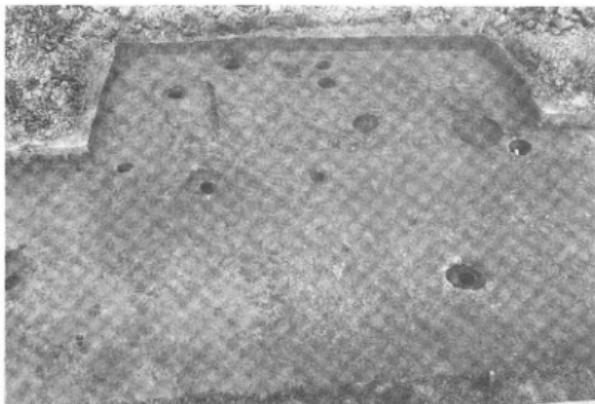


fig. 425 第8トレンチ



fig. 426
第11トレンチSB01
炭化層検出状況

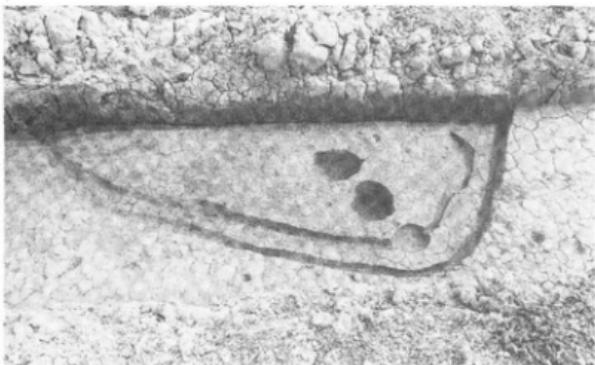


fig. 427
第11トレンチSB01

第12トレンチ 幅約3m、全長約59mを測る。旧耕土直下に遺構がひろがる。鎌倉時代の土坑、柱穴、溝、木棺墓を検出した。

S X01 S X01は、東西2m以上、南北2m以上、深さ0.3mの掘形の内に、竹を曲げて直径約1.2mの枠をつくっている。竹の輪を4段分積み重ねて、枠の内側の4か所に竹片を縱方向に打ちこんでいる。竹は表面を外側に向けて曲げており、1本の竹の幅は、2.0~2.5cmである。竹枠の内側及び掘形の内からは、鎌倉時代の須恵器などが出土している。

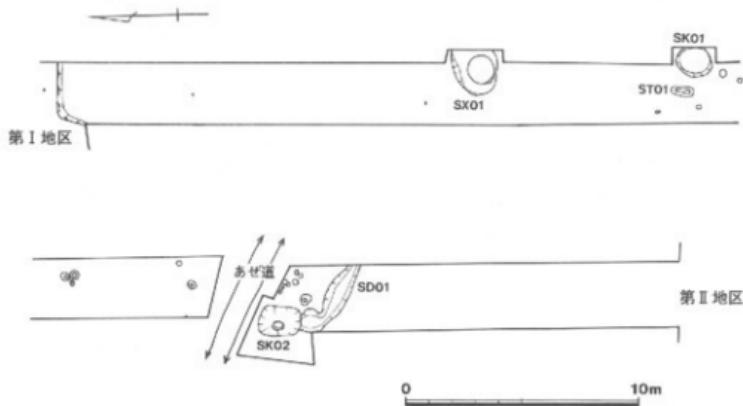


fig. 428 第12トレンチ 平面図

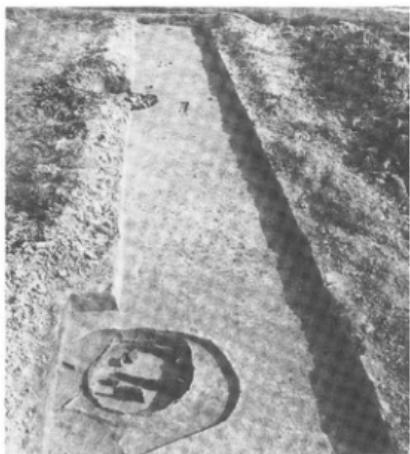


fig. 429 第12トレンチ北半部



fig. 430 SX01

SK01

SK01は、直径約1.3m、深さ約0.35mの不定形で、多数の円礫、自然木、加工木、須恵器、土師器が乱雑に埋置されている。用途は不明。時期は、13世紀前半ごろに属する。

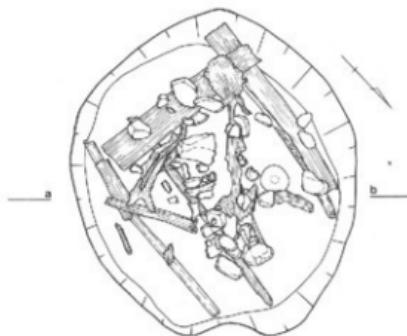


fig. 431
SK01 平面・断面図



fig. 432 SK01 遺物出土状況

SK02

SK02は、南北2.1m、東西1.6m、深さ1.2mを測る。断面は2段になっている。断面中位付近の深さで、直径5~10cmの表皮をつけた丸太材が2方向に重なっている。また、西辺には、丸太杭を打ち込み、厚さ1~2cm、長さ100~140cm、幅20~30cmの板材を5枚程度受けている。板材は本来は

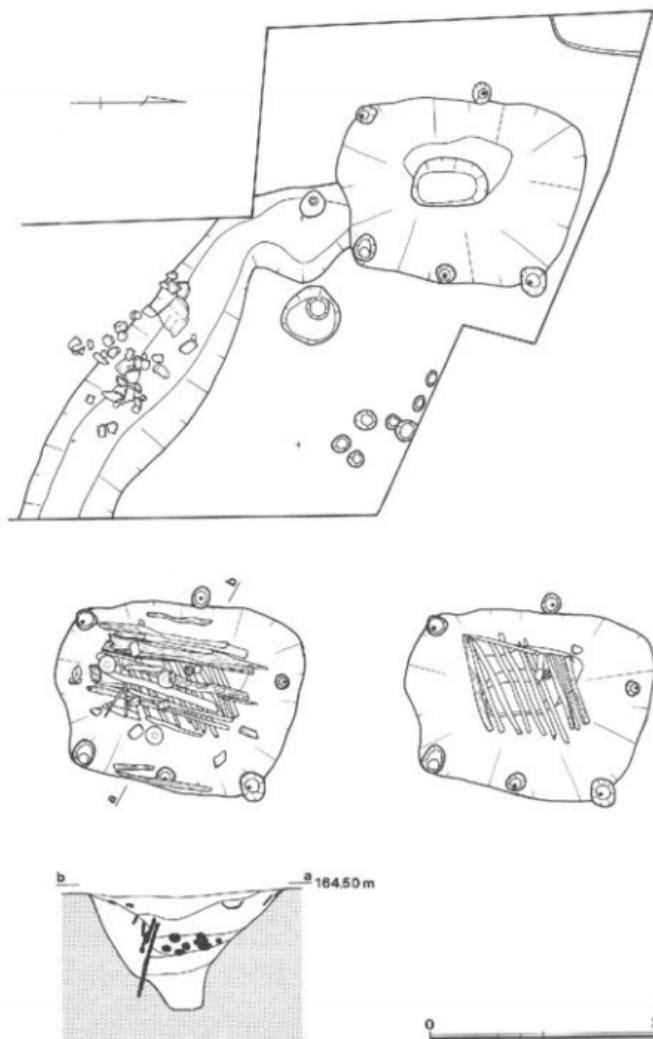


fig. 433
第12トレンチ
SK02・SD01平面図

水平に置かれ、足場のような機能を果たしていたと推定される。丸太材の原位置は出土状況からは断定し難く、この土坑の機能も不明である。丸太材の上層から須恵器壇の完形品が3個体出土している。時期は13世紀前半に属する。

なお、この土坑の周囲に6本分の柱穴があり、柱穴内には、先端を杭状に削った柱材が残存していた。このことから土坑の上部に簡単な上屋があったものと推定できる。

SD01 S D01は、SK02の南邊から南東に流れ出す溝である。埋土から、須恵器、土師器の細片と円碟が出土している。

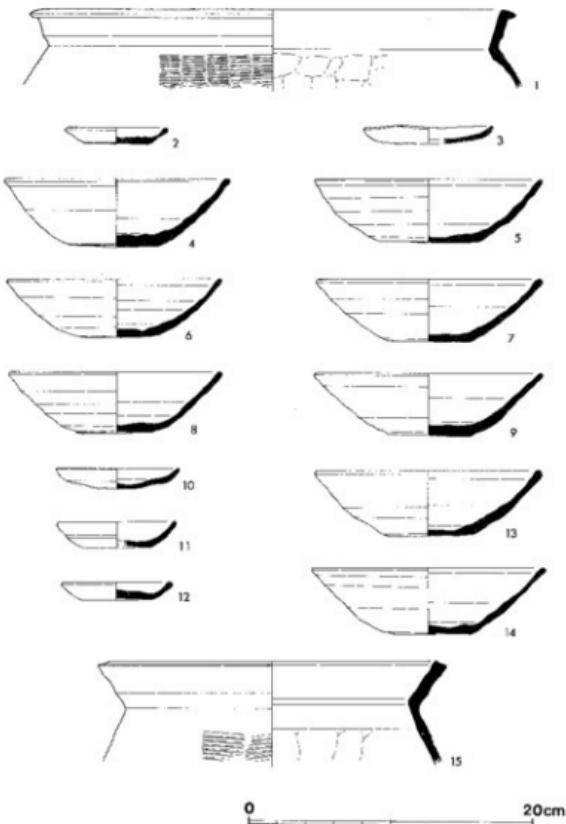


fig. 434

第12トレンチ
出土土器実測図

1・2: SK01
3~9: SK01
10~14: SD01 15: SP09

ST01

長さ0.92m、幅0.34~0.37mの掘形をもつ木棺墓である。蓋板、側板、小口板が残存する。側板、小口板は、土圧により内傾、若しくは外傾している。棺材は針葉樹の板材で、厚さ2~3mm程度しか残存していない。棺の全長は0.85m、幅0.17mと推定できる。蓋板直上から土師器の皿の約1/2の破片が出土している。時期は13世紀に属する。



fig. 435 SK02・SD01

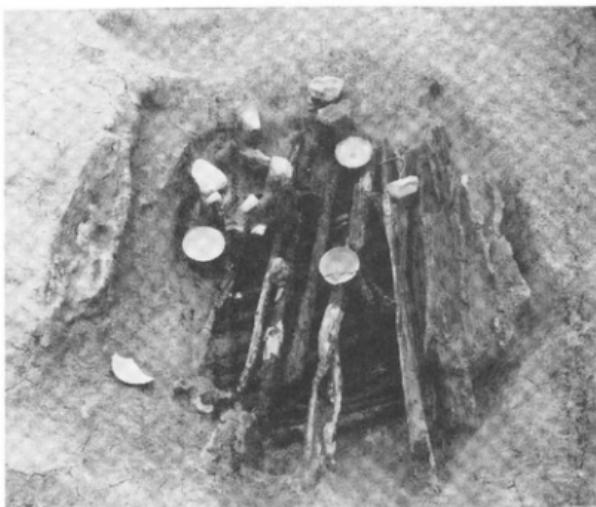


fig. 436 SK02

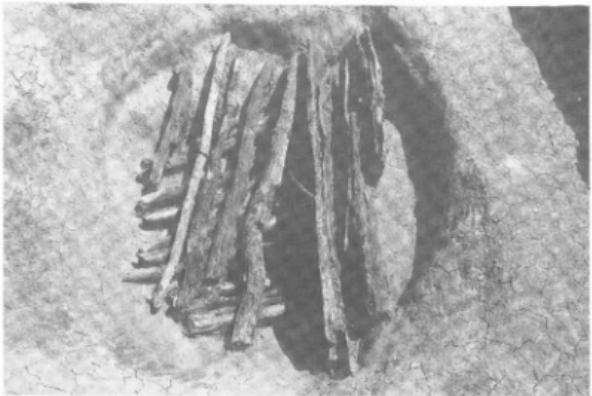


fig. 437 SK02

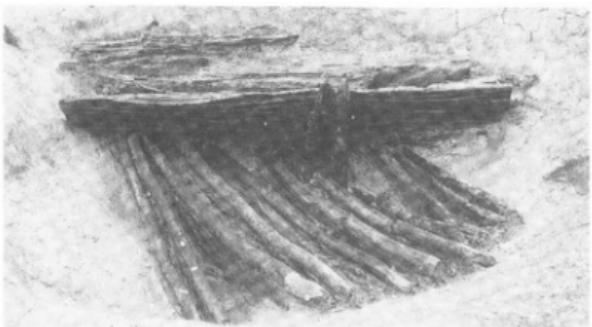


fig. 438 SK02

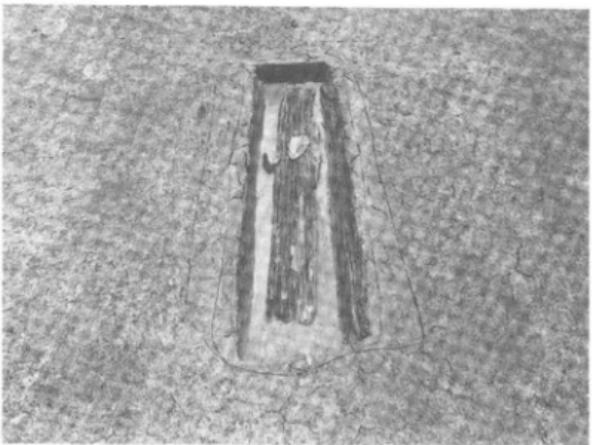


fig. 439 ST01

- 第Ⅰ地区 南北9m、東西39mを測る。旧耕土直下に遺構面がひろがる。鎌倉時代の柱穴、土坑と古墳時代の掘立柱建物1棟、溝1条を検出した。
- SB01 2間×4間の掘立柱建物。南北約8m、東西約5mの南北棟。時期は6世紀後半に属する。
- SD01 幅約0.5mの南流する溝。南端は後世の削平により終っている。SB01と同時期に属する。

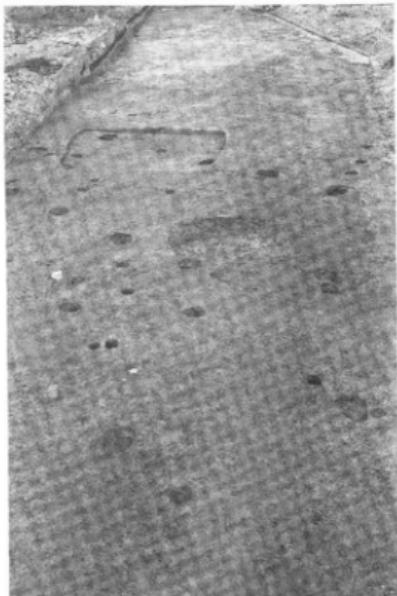


fig. 440 第Ⅰ地区 西半部

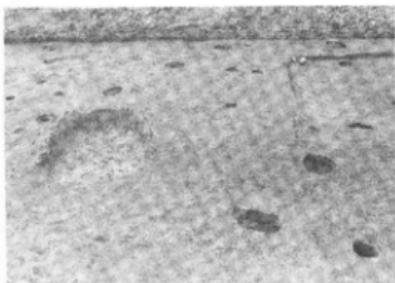


fig. 441 SB01

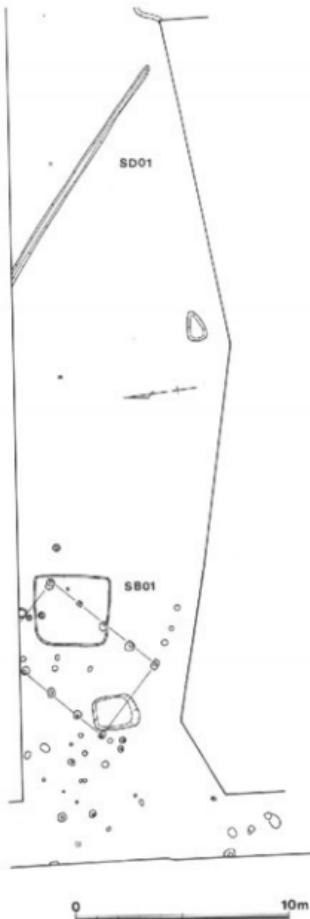


fig. 442 第Ⅰ地区遺構平面図

第Ⅱ地区

南北9～18m、東西40mを測る。2面の遺構面があり、第1遺構面と第2遺構面の間に約50cmの間層がある。第1遺構面は、鎌倉時代に属し、第2遺構面は古墳時代前期に属する。

第1遺構面では、柱穴、溝、土坑、掘立柱建物1棟を検出した。

S B01

南北2間×東西3間の東西方向の掘立柱建物である。建物規模は南北約4.7m、東西6.2mを測る。13世紀前半ごろと推定できる。

第2遺構面では、土坑、焼土坑、落ち込みを検出した。土坑及び落ち込み内から完形の壺、甕が出土している。



fig. 443 第Ⅱ地区全景

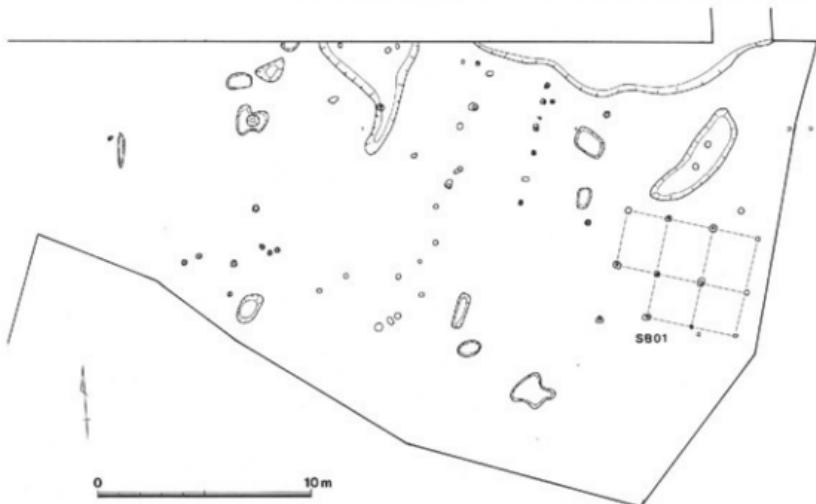


fig. 444 第Ⅱ地区平面図

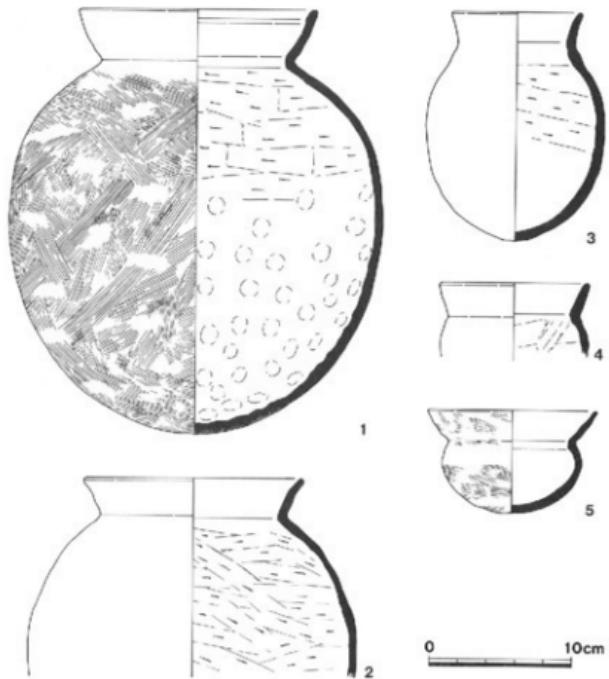


fig. 445 第Ⅱ地区
落込み出土土器実測図

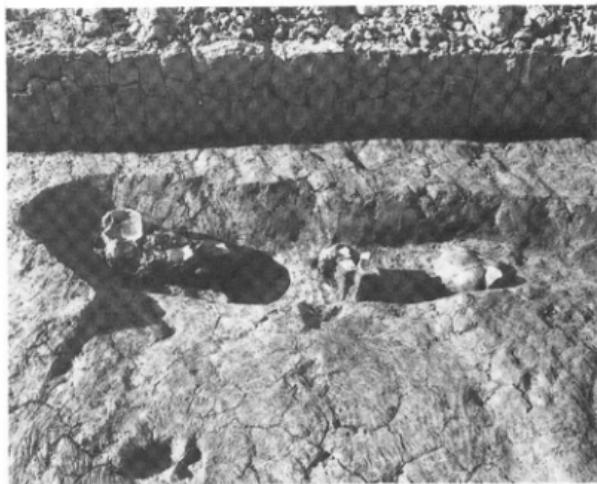


fig. 446
落込み内土器出土状況

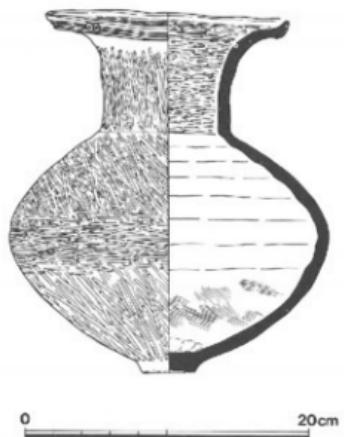


fig. 447 第Ⅱ地区 SK01 出土土器

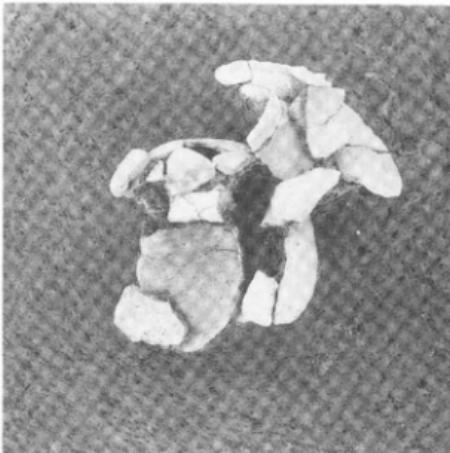


fig. 448 SK01 土器出土状況

第Ⅲ地区 南北55m、東西20mを測る。古墳時代の竪穴住居2棟、方形落ち込み2基、上坑、ピット多数を検出した。

S B01 S B01は東西4.9m、南北3.3mの長方形の竪穴住居。深さ5cm程度しか残存していなかった。北辺の中央やや西寄りに竈址を検出した。竈のたき口付近に土師器甕と高塙が原位置を保って出土した。出土した土器から古墳時代中期に属すると推定できる。

S B02 S B02は東西5.3m、南北5.5m、深さ約0.2mを測る。ほぼ中央にスラッグを含む直径約0.5mの黄色粘土塊があり、東側に近接してガラス状に熔着した直径約0.3mの粘土床がある。床面のほぼ全域からスラッグが出土している。また、床面のピット内からは、フイゴ羽口が1点出土している。これらのことから、なんらかの金属性物質の加工作業が行われていたと推定できる。スラッグは、アメ状のガラス化したものと、多孔状の2種がある。両者とも蛍光X線分析の結果、鉄を主成分とし、銀、銅、錫などを若干含む物質であることが判明しているが、いかなる加工作業によって生じたものであるのかは結論がでていない。なお、滑石製臼玉2点が出土している。

多数の柱穴を検出したが、建物の配列としては明確ではない。柱穴の内から若干であるが古墳時代の須恵器小片が出土している。

調査区の北西端で北側への落ち込みがあり、復元完形となる土師器甕4点、壺1点が倒れ込んでいた。

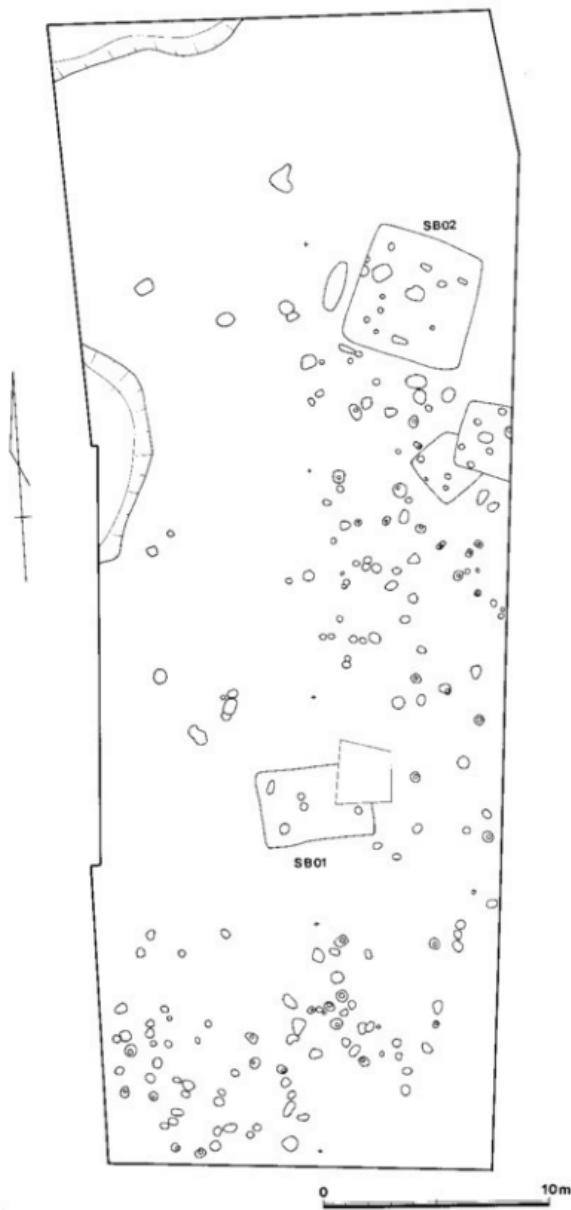


fig. 449 第四地区平面図



fig. 450
第Ⅲ地区全景



fig. 451
第Ⅲ地区全景（南から）



fig. 452 横穴住居



fig. 453 SB02

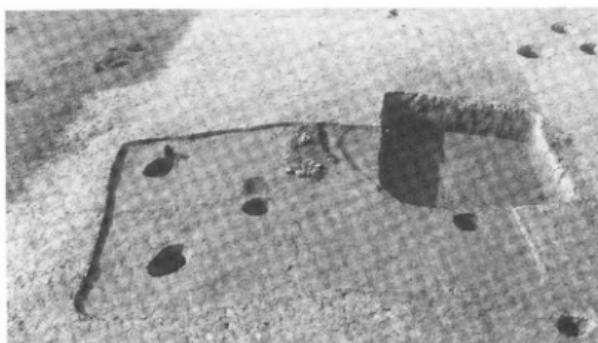


fig. 454 SB01

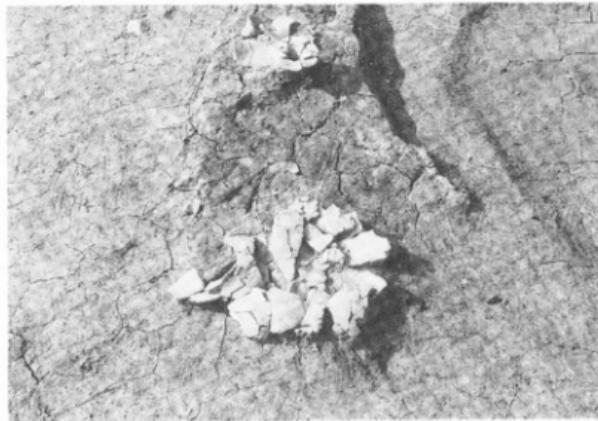


fig. 455
SB01 陶土器出土状況

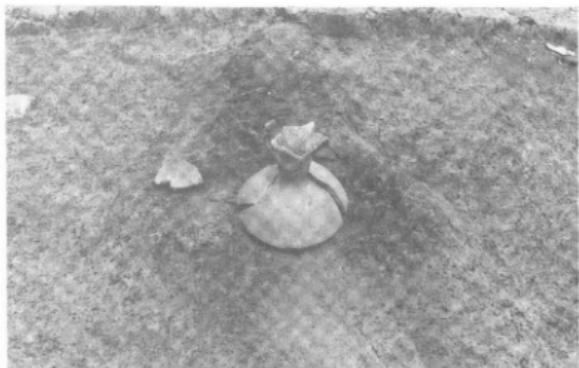


fig. 456
SB01 発完掘状況



fig. 457 落込み内
土器群01出土状況

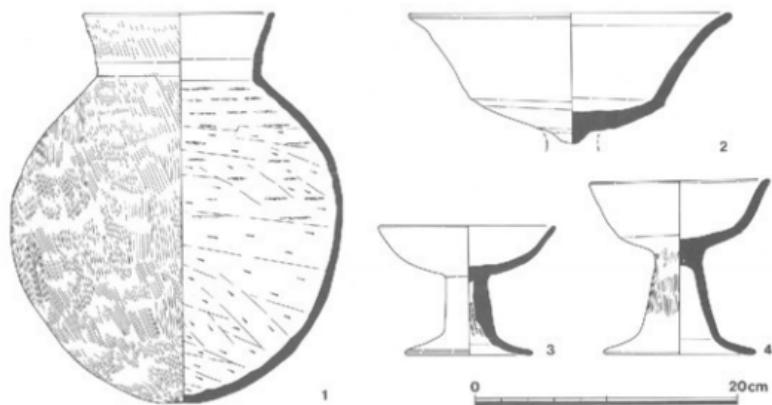


fig. 458 第Ⅲ地区 SB01 出土土器実測図

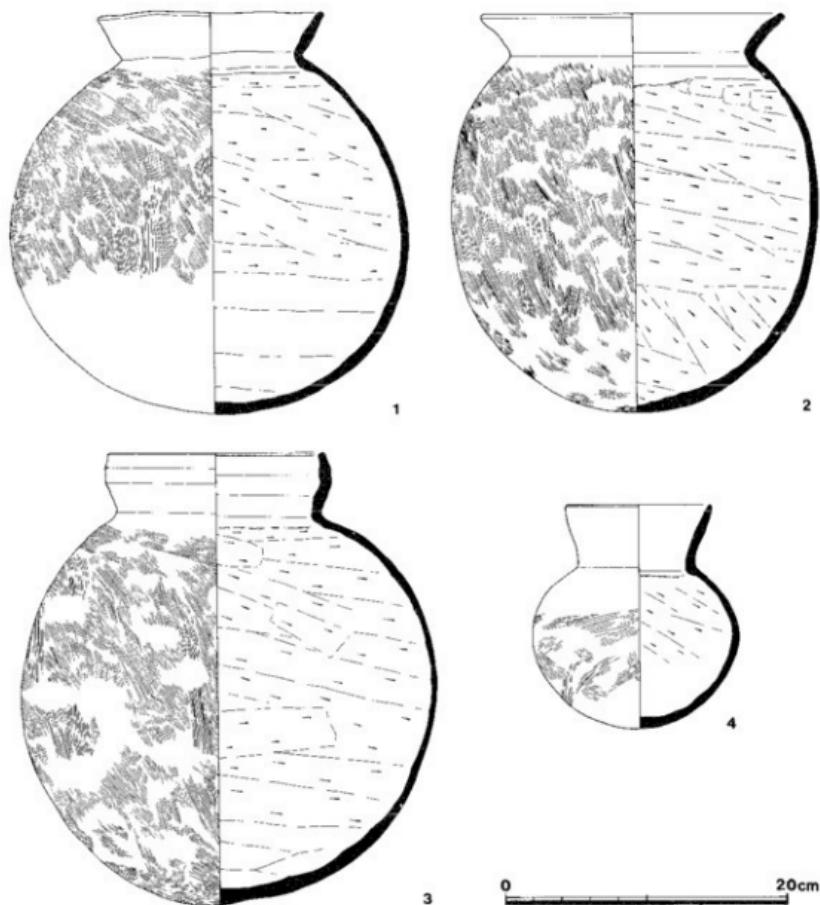


fig. 459 第Ⅱ地区 七器群01 出土土器実測図

3.まとめ

今回の調査によって宅原遺跡の有井地区全体をトレンチ調査したことになる。有井地区は長尾川北岸に位置し、この地区的下流側では顕著な造構が認められず、上流側では沖積地が狭くなり、丘陵が河川と並行して走り、その頂部には前期～後期の古墳が点在している。このように地形的には比較的閉塞した環境にある。

調査の結果、全城に古墳時代前期～後期の集落が存在していることが判明した。古墳時代前期から中期の造構は、主に調査域の中央から西半に集

中している。しかし竪穴住居のあり方は、あまり密集せず散在的な傾向にある。合計19棟の竪穴住居と2棟の掘立柱建物を検出している。そのうち7棟は、床面に炭化材が多数残っており、焼失したために廃棄されたものである。住居址を時期別にみると、前期（ほぼ庄内期に並行）では竪穴住居6棟、中期（ほぼ布留式並行）では竪穴式住居2棟、後期（6世紀前半）では竪穴式住居11棟、掘立柱建物2棟となる。なお焼失家屋は、前・中・後期のいずれにも見ることができるので、一過的な火災により住居が廃棄されたのではなく、幾度となく火災が発生し、その度場所を移して新たな住居をつくりなおしたと考えられる。焼失した竪穴住居は内垣地区でも検出されており、この地域での焼失家屋の出現率の高さが注目される。第II地区からは古墳時代前期に先行する可能性のある土器数個体出土しているが、所属時期については、断定しかねる。

鎌倉時代の遺構としては、掘立柱建物1棟、規模不明の建物柱穴、土坑、木棺墓などを検出した。これらは調査区の東半で特に多く検出している。トレンチ調査が多いため、建物の規模が明らかになるものがほとんどないが、多数の柱穴を検出している。建物以外には、第12トレンチのSX01がある。これは外観上土臼のようであるが、掘形によって地中にあることから、土臼としては不自然な状態にあり、その名称・用途は不明である。同トレンチのSK12は、杭、板が良好な状態で遺存しており、当時の姿をある程度復原することができるが、その用途については廻、井戸などが想定できる。しかし、周囲の建物の状態が未調査のために判明していない現状では、この遺構の性格を確定することが困難である。さらにST01は極めて小さい木棺墓で、成人埋葬とは考え難い規模であり、これも周囲の建物との関係が注目される遺構である。これらはいずれも木質が良好に遺存していたために、ある程度の原形復元が可能になった遺構である。木棺については蓋板を置いたまま、発泡ウレタンにより切り取っている。

以上が調査の概略であるが、未だ整理作業が完了しておらず、遺物の所属時期を確定しないまま、遺構に時期を与えている。特に庄内期～布留式並行期の指標になり得る一括資料の検討が不充分であり、今後の作業によって所属時期を訂正する可能性が予想される。また、スラッグの分析、炭化材の樹種鑑定などの基礎的作業も課題として残されている。

今回の調査によって、長尾川流域の古墳時代、あるいは鎌倉時代の様相を考えていく上で、欠くことのできない遺構、遺物がこの有井地区に拡がっていることを証することができた。今後、調査資料の細かな検討と同時に、流域全体の中でこれらを位置づけていく必要がある。

25. 宅原遺跡（内垣地区）

1. はじめに

北神中央線は、北神、北摂ニュータウンを結ぶ幹線道路として建設が予定され、昨年度第1次調査として岡下地区の発掘調査が実施された。調査の結果、飛鳥時代から奈良時代の大溝、土坑、河道等と鎌倉時代から室町時代の掘立柱建物、土坑、ピット等が検出されている。また、遺物は飛鳥時代中頃から奈良時代の須恵器壺・壇・台付長頸壺・鉢、土師器甕・壺等が多量に出土している。中でも壺蓋裏に書かれた「評」の墨書き土器は郡衙跡を考えるうえでも重要な遺物と思われる。

今回の調査は、昨年度の続きで飛鳥時代から奈良時代にかけての遺構・遺物の関連および遺跡の範囲を確定するとの、下層遺構の性格を調査するため、岡下地区から現状道路を隔てた北側の内垣地区を、予定道路幅員20m、路線長110m、面積2,200m²の範囲で実施した。

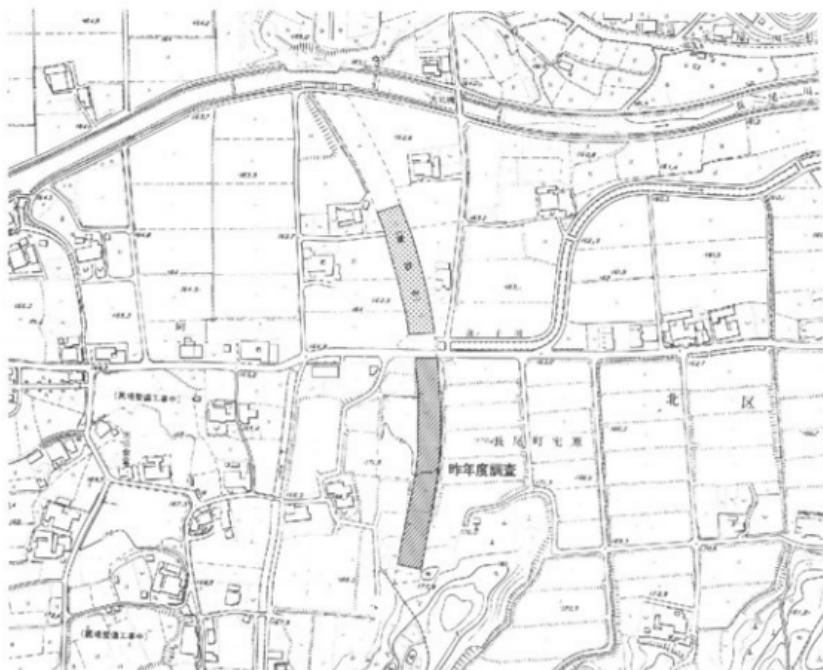


fig. 460 調査地位置図 1:5,000



fig. 461 調査地全景（北から）



fig. 462 調査地全景（南から）



fig. 463 調査地遺構平面図

2. 調査の概要

発掘調査は、昨年度の試掘調査結果をもとに、約2,200m²を設定し、重機による表土排土から始めた。当初造構面は二面あると予想し、上層の面を精査したが、中世の遺物が若干出土したのみで、造構は全く検出されなかった。

下層の造構面は、上層面よりさらに40cm下のため、再度重機による掘削を開始した。検出された造構は、弥生時代後期の竪穴住居3棟、溝5条、土坑10基、時期不明の掘立柱建物1棟、溝1条、河道等である。

SB01

直径11.5mの大型円形の竪穴住居で、2回建て替えを行っている。当初は周壁溝の痕跡から直径9.4mで6本柱と考えられる。住居址中央部に長径1.5m×短径1mの楕円形土坑が掘られている。その後の建て替えで直径10.4mと拡張され8本柱と大きくなっている。中央土坑周辺に4本の支柱を建て、建物を強固にしたと思われる。さらに、その後、建て替えを行い、拡張をし、10本柱で中央土坑周辺に4本の支柱を建てている。柱穴は15~20cm前後でいずれも深く床面から60~70cm埋め込まれていた。2回目と3回目の建物柱穴は底部に礎板を据えていた。2回目8本柱の礎板はいずれも、棒状もしくは木片で据えられていたが、3回目10本柱の礎板は、厚さ3cm程度で6角形ないし8角形の板材が置かれていた。当初の住居址は中央土坑からSD02の大溝までの間を溝でつないでいたと思われるが、建て替え以降は埋められていた。中央土坑は深さ約80cmで木材、弥生土器、炭が埋まっていた。土坑の三方は土堤状にやや高まり、炭の層が拡がっていた。2回目以降は炉として使用した可能性が強い。この住居址は東側に

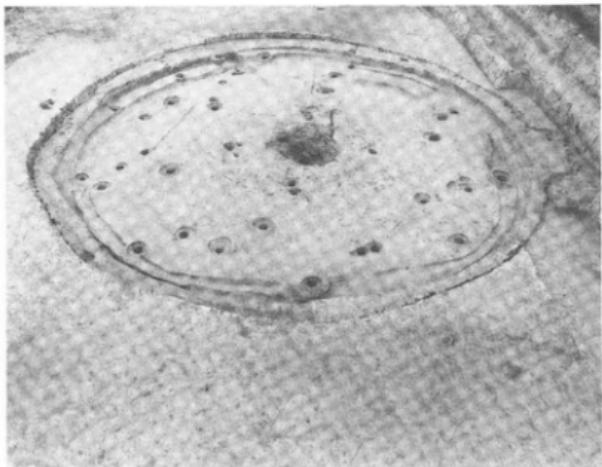


fig. 464 SB01

約1.7m×0.7mの突出部があり、入口を付設していると思われる。周壁溝内は小さなピットが断続的に連なっており、腰板を止めたと考えられる。最終住居址は貼り床があり、ベッドを持っていた可能性があるが、かなり崩れて中央部へ流れていたため、ベッドとして確認することはできなかつた。住居址内からは弥生土器の高環、甕、鉢のほか石庵丁片が出土している。また、柱穴断ち割りの際、下層の青灰色粘質砂層内より縄文土器（後期・中津式）が出土した。

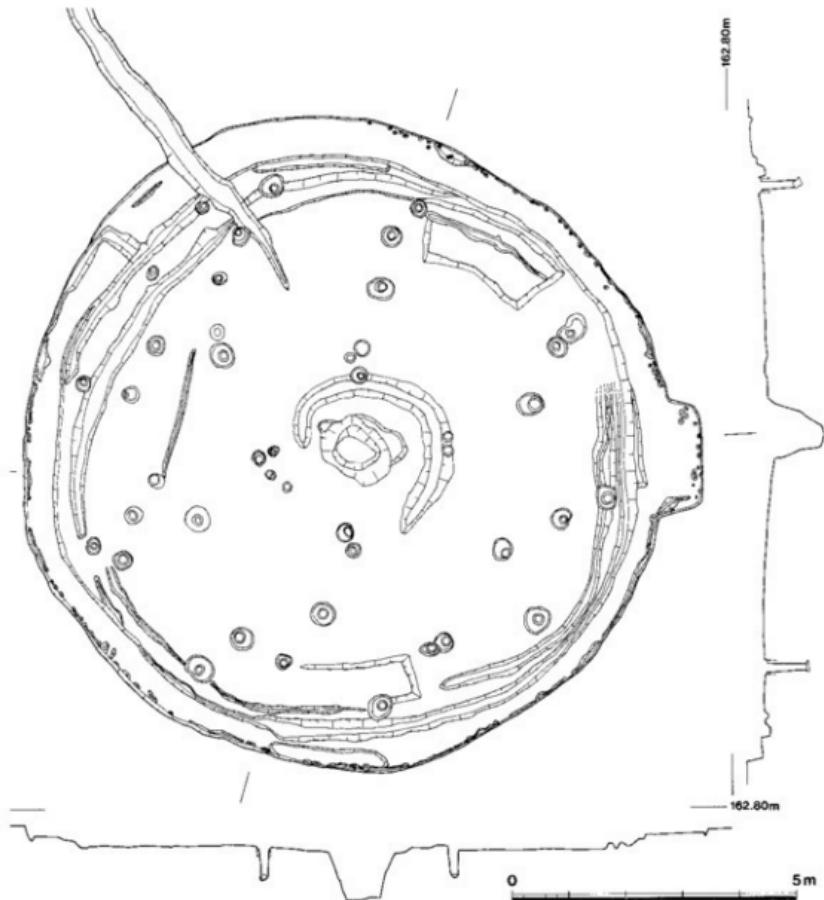


fig. 465 SB01 平面・断面図

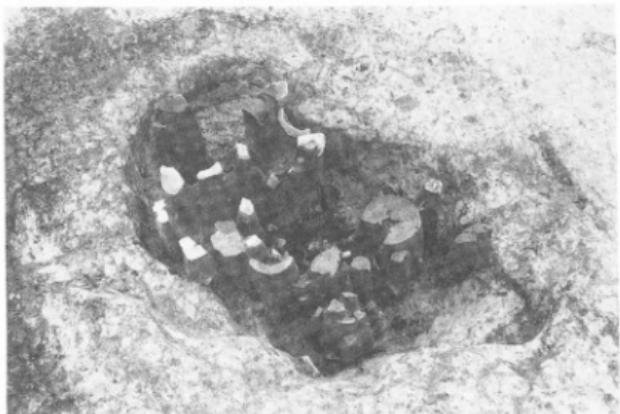


fig. 466 SB01
中央土坑上層
土器出土状況

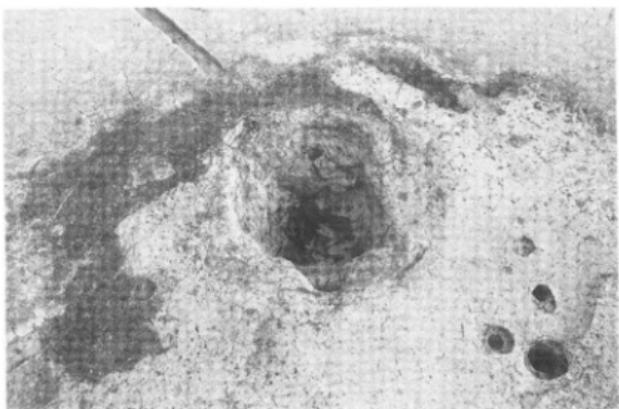


fig. 467 SB01
中央土坑及び
床面炭出土状況

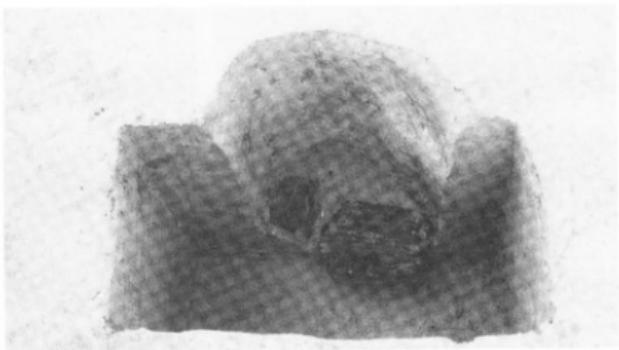


fig. 468 SB01
柱穴断面
礎板出土状況

SB02

南北4.1m、東西3.6mの小型方形住居址で、南側に1.8m×1.1mの突出部がある。この部分は床面が一段高くなっている。また、住居址の北辺も幅1m床面が高くなっていた。火災にあったと思われ、炭化材が焼け崩れたままの状態で検出された。これらの炭化材を観察すると、垂木に丸太材を使用しただけでなく、板材もかなり多く使用した痕跡が見られた。炭化材を除去し精査した結果、柱は2本柱で、うち1本は焼けて炭化したままで検出された。床面より約40~45cm深く埋められ、棒状木材を礎盤として使用していた。住居址中央部の西壁寄りに、径約50cm、深さ30cmの土坑があり、中心部から土坑をとり高く形で一段高くなっていた。この部分が出入口と思われる。また、周壁溝の中にさらに小さな溝状の落ち込みが見られた。住居址の周壁を腰板で止めていたと思われる。住居址内の出土遺物は少なく、床面に壺1個と土坑内に小型鉢1個が出土したのみである。

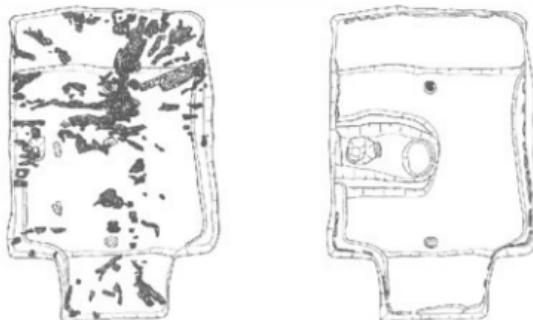


fig. 469 SB02平面図
(左) 炭化材出土状況
(右) 完掘状況



fig. 470 SB02 炭化材出土状況



fig. 471 SB02 完掘状況

SB03

南北7m、東西6.7mの方形住居址で、周囲に幅約1mのベッド状遺構が巡っている。住居址の西南側に約2m幅でベッド状遺構が切れている部分が見られた。入口にあたると思われる。中央土坑は、径80cm、深さ30cmで、砥石、炭化材、炭が検出され、炉として使用されたと思われる。ベッド状遺構の北西側には、高壺、甕、鉢など比較的形のはっきりしたものが出土しているが、中央床面部は小片が散乱していた。また、西南のベッド状遺構が切れている所から手焙形土器が出土している。中央床面の散乱遺物の下から炭化物が検出され、カヤカツラを敷いていたと考えられるが、織った痕跡は認められなかった。柱は4本柱で、北東側の柱は立ったままの状態で柱根が出土している。

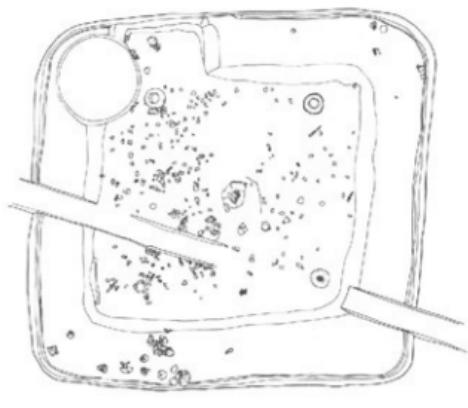


fig. 472 SB03
遺物出土状況平面図

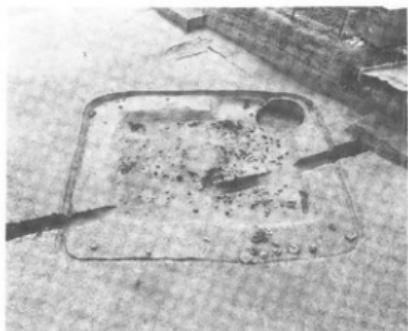


fig. 473 SB03 遺物出土状況

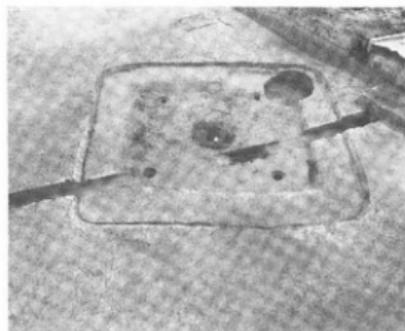


fig. 474 SB03 完掘状況

S B04 S B 03の北側にあり、東西2間(4.5m)×南北3間(5.4m)以上の掘立柱建物で、遺物が皆無のため、時期は不明である。弥生時代の遺物包含層を切り込んで建てられていることから弥生時代終末期以降の建物と思われる。

S K10 S B 03の南側に長径約1m、短径約40cm、深さ5cmの浅い土坑が検出された。遺物は皆無であったが、この住居址に伴う遺構と思われる。

S D01 S B 01の南側と西側に、住居址をとりまくような形で連なっている。土

S K01~09 坑や溝は深さ5cm~20cm前後で、弥生時代後期の土器片が出土している。現状ではそれぞれ独立しているが、本来は住居址のまわりにめぐっていた溝で、上部が削平され、底部の深い部分のみが残ったと思われる。

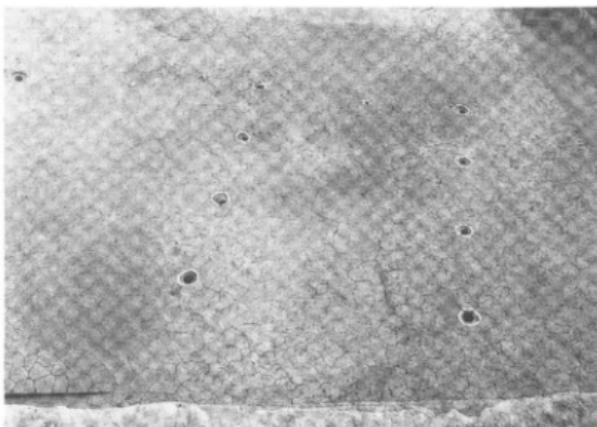


fig. 475 SB04

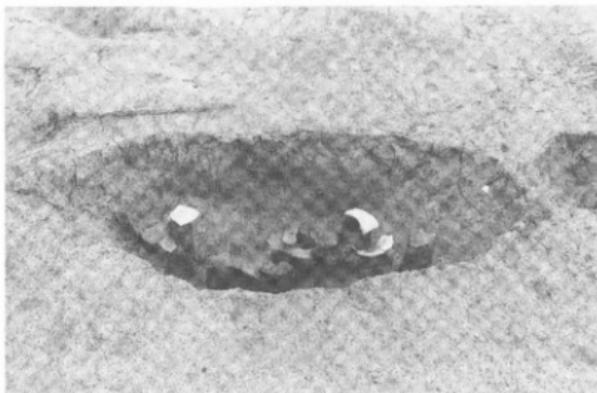


fig. 476
SK07 遺物出土状況



fig. 477 SB01・SD02

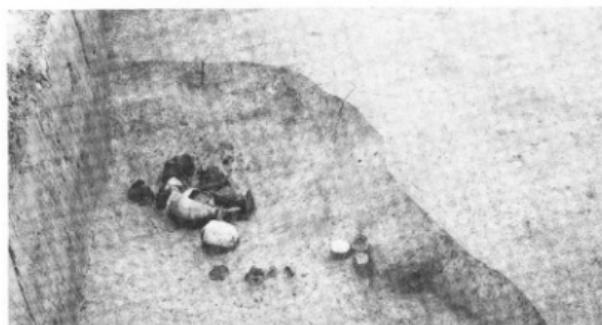


fig. 478
SD06 遺物出土状況

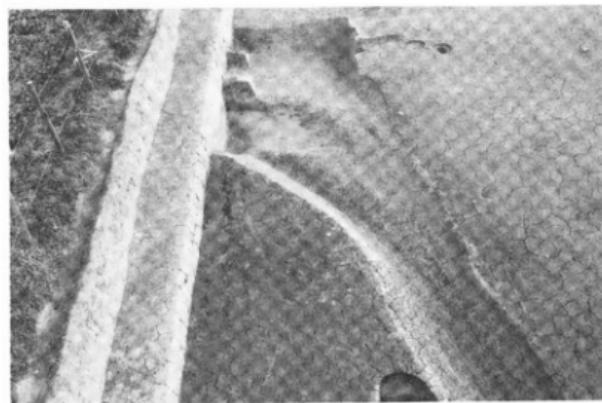


fig. 479 SD04・05

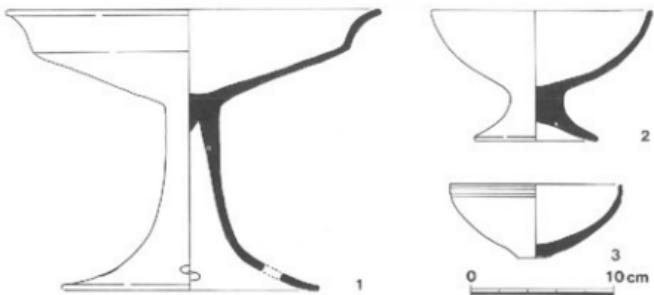


fig. 480
出土遺物実測図
1・2 : SB01
3 : SB02

S D 02 S B 02住居址の北側を幅3m、深さ0.7mの溝が東西に流れている。溝中から弥生土器のほか、底近くから小型の銅鏡が1点出土している。おそらく、この溝にS D 01、S K 01~09の溝が取りつき、住居址を区画していたと思われる。

S D 03 レンチの北東隅に幅約1m、深さ30cmの溝が流れているが、時期不明である。検出面から見てS B 04と関連する時期の可能性もある。

S D 04・05 S D 03の下層で、南側で2条に分かれれる。弥生後期の遺物が出土している。この2条の溝が後世1条になり、S D 03として使用されたと思われる。

S D 06 幅0.7m~1.5m、深さ20cm~35cmで西へ折れ曲がる溝である。溝底より弥生土器の壺がほぼ完形で出土している。一部しか調査できず、全体の規模、形状は不明であるが、周溝墓の可能性がある。

河 道 S B 01・02とS B 03の間に幅約30mの河道が確認された。今回の調査では少なくとも上層には弥生土器が混入しており、弥生時代終末期には河道が流れていると思われる。河道底までの深さは推定で6mと考えられ、河道の調査は次年度以降再度実施することとした。



fig. 481 SB01 複元状況

じょうづか こふんぐん
26. 定塚古墳群

- 1. はじめに** 定塚古墳群は、武庫川の支流である長尾川北岸に東西に展開する丘陵の一支脈、標高160m～170mの南北にのびる丘陵根上に位置する。尾根先端に位置する1号墳からは眼下に宅原遺跡を望むことができる。定塚古墳群は北神中央線の路線敷予定地内に分布調査した結果、既発見の狹門古墳を含めて11カ所の古墳状隆起を確認した。
- 2. 調査の概要** 今回本調査を実施した古墳は丘陵の西南端に位置する1号墳、丘陵の頂部に位置する2号墳である。2号墳の北側の尾根鞍部と尾根頂部に位置する3号墳～7号墳については、墳丘の範囲について確認調査を実施した。

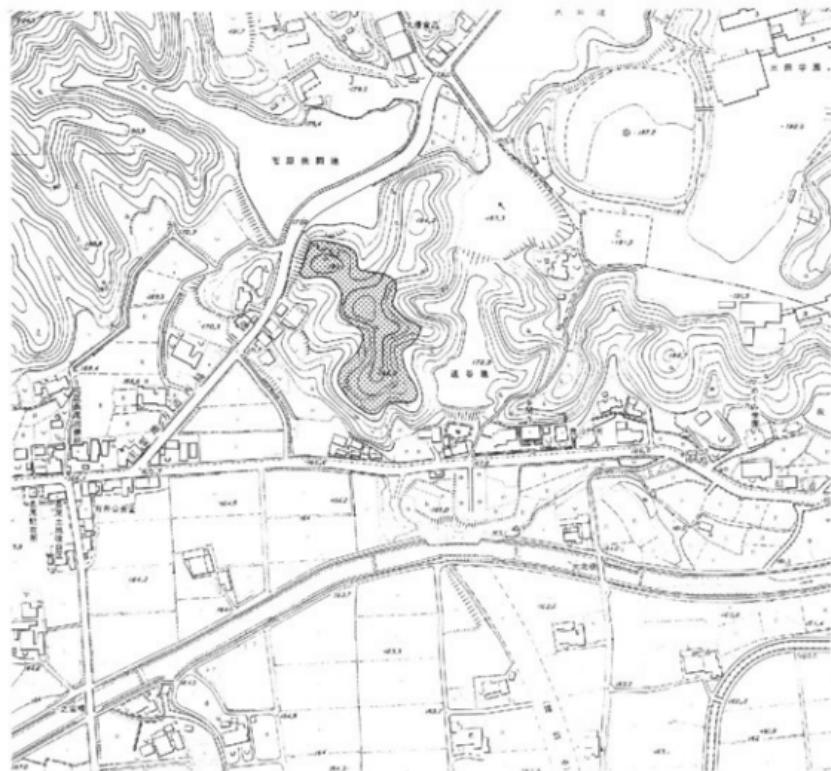


fig. 482 調査地位置図 1:5,000

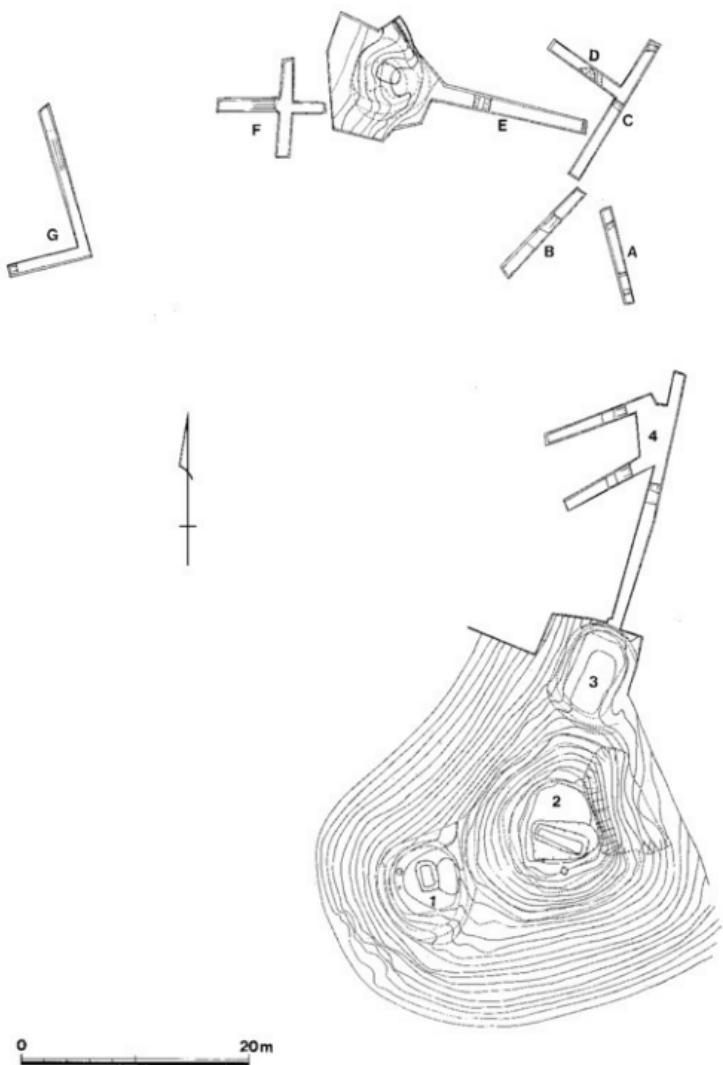


fig. 483 定塚古墳群調査地平面図